# 目　次

１.平成 30 年度浦安市青少年海外派遣事業を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １
２.姉妹都市交流とは？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２
３.浦安の姉妹都市～オーランド市～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２
４.浦安市青少年海外派遣事業とは？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２
５.オーランドってどんなところ？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３
６.実施計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ４～５
７.浦安市青少年海外派遣選考委員会の設置及び運営に関する要項・・・・・・・・・・ ６～７
８.選考委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７
９.派遣生名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ８
10.派遣生の選考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ９
11.研修等プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
12.本研修日程表・実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11～19
13.派遣生報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20～70
（１）海外派遣全体を通して
（２）ホストファミリーとの交流
（３）内容別報告
14.英語による日本紹介　各グループの発表資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71～77
15.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

# １.平成 30 年度浦安市青少年海外派遣事業を終えて

平成 30 年度浦安市青少年海外派遣団
団長　　増田 丈巳

平成 30 年度の「浦安市青少年海外派遣団」を代表し、関係者の皆様と、オーランド市の皆様に多大なるご協力を賜りましたことに、心より感謝を申し上げます。

この青少年海外派遣事業は、市内在住の青少年を姉妹都市のオーランド市に派遣し、異文化体験や市民との交流を通して、本市の次代を担う若い世代の国際的な視野を広げ、国際社会を担う人材を育成することを目的に実施しているものです。

平成 30 年度は、平成 31 年３月６日から１５日までの日程で、オーランド市を訪問し、ホームステイや高校の授業体験、生徒との交流、施設訪問、日本文化紹介などを行いました。

オーランドでは訪問したすべての場所で、私たちを大変温かく迎えていただきました。

派遣生が、自身の進路や地域社会を考える機会とするため、大学、起業を支援する施設、高齢者が健康増進や仲間づくりを行う施設などを訪問しました。

本研修前の段階においては、レポートのテーマを割り当て、施設に関する事前学習や交流の準備を行うことで、現地で得るものはより一層大きくなったと考えています。

派遣中は気候にも恵まれ、文化や習慣、物の考え方、社会のしくみの違いなど、海外旅行では学ぶことのできないことを経験し、国際的な視野が広がったものと考えています。

また、Dr.Phillips 高校で行った日本文化の紹介では、楽器演奏や踊りなど、今までにないパフォーマンスを取り入れ、大変喜ばれていたように見受けられました。

報告会では、「自分の目で見たものを発信することを怠らず、これからも学ぶことを深めていく」など派遣生から様々な声が聞かれ、それぞれが多くのことを学び、これからの人生に生かしていこうとしていることが伝わってきました。

今回のこの経験を生かして、更なる飛躍をされることを願うとともに、本市の多文化共生社会のまちづくり、来年に迫った東京 2020 オリンピック・パラリンピックに関連した、国際理解・交流の活動、姉妹都市交流、そして地域における交流にこれからも積極的に関わっていただき、活躍することを期待しております。

## ２.姉妹都市交流とは？

姉妹都市のルーツは米国と言われています。第２次世界大戦終結後、本当の世界平和をもたらすには市民レベルでの交流が必要だと、米国のアイゼンハワー大統領によって提唱されました。さまざまな国の市民同士が友達になりお互いに理解しあい、協力しあうことが、ひいては国同士の相互理解と協力に結びついていくということが認識されてきたのです。

そしてこの運動の輪は世界中に広まり、本国米国だけでも１、100 を超える都市が姉妹都市交流に参加し、日本でも約 850 の自治体が姉妹都市を持つにいたっています。

姉妹都市交流を通じて、私たちは異なった文化を持つ人々とのふれあいをより身近に体験することができます。この地球上には何千、何万という異なった文化があり、今やそれらは私たちの生活とは決して無縁であるとは言い切れない時代になっています。姉妹都市との交流は、私たちが真の国際人となっていく過程の第一歩であるとも言うことができるのではないでしょうか。

## ３.浦安の姉妹都市　～オーランド市～

昭和６２年から「浦安市国際交流協会」により姉妹都市の選定が始まりました。様々な勉強会や議論を経て複数の候補からオーランド市を選定した後、平成元年 10 月 23 日にオーランド市で、続いて平成２年１月 27 日に浦安市で姉妹都市協定の調印式が行われました。平成元年は浦安が村として誕生してから 100 年目にあたる記念の年であり、提携は浦安誕生 100 周年を記念する１大イベントとして祝福を受けることになりました。

## ４.浦安市青少年海外派遣事業とは？

浦安市とオーランド市との姉妹都市提携を機に、青少年での交流を促進することを目的として、平成２年度より浦安市青少年海外派遣事業が実施されています。浦安市青少年海外派遣事業では、市内在住青少年をオーランドへ派遣し、ホームステイや現地高校授業体験、市内施設見学、市庁舎訪問など、市民や青少年との交流を図っており、これまで 25 回、317 名を派遣しました。

感受性豊かな時期に、外国の文化や習慣を実際に体験し、様々な交流を持つことで、国際的視野と豊かな国際感覚を身につけてほしいと考えています。

なお、青少年交流の他にも、スポーツ交流、学校交流、障がい者交流など様々な分野で交流が行われています。

# 5.オーランドってどんなところ？

アメリカ合衆国　フロリダ州オーランド市

位置：西経 81 度、北緯 28 度
　　オーランド市との時差＝日本時間－14 時間（夏時間の場合は－13 時間）

気候：亜熱帯性気候

年平均気温：22℃

面積：295.3ｋ㎡

人口：２７７，１７３人(2016 年末)

市制施行日：1875 年７月 31 日

　オーランドは元来、柑橘類などを中心とする農業で栄えた町でしたが、オーランド近郊にケネディ・スペース・センターやディズニー・ワールドができたことにより、急速に成長をはじめました。
　市近郊には、ディズニー・ワールドのほか、ユニバーサル・オーランド・リゾート、シーワールドなど、いくつものテーマパークがあります。そのほかにも、100 を超えるゴルフ場やリゾートホテルが林立し、多数のショッピングモールもあります。
　全米屈指の観光・保養都市として発展している一方、手つかずの自然環境も大切にし、「シティー・ビューティフル（美しいまち）」を合言葉に、環境保全・自然保護にも取り組んでいる美しいまちです。

## オーランド市の位置図

# ６.実施計画

（１）目　　的　　米国フロリダ州オーランド市との姉妹都市交流事業の一環として、本市在住の青少年をオーランド市に派遣し、ホームステイ、公共施設や教育機関の訪問等による異文化体験やオーランド市民との交流などをとおして、本市の次代を担う若い世代の国際的な視野を広め、国際社会を担うにふさわしい人間を育成する。

（２）主　　催　　浦安市

（３）派遣期間　　平成31年３月６日（水）～３月15 日（金）　８泊10日

（４）派 遣 先　　米国フロリダ州オーランド市

（５）派遣内容　　市役所訪問、現地高校授業参加、ホームステイ、公共施設や教育機関訪問等

（６）派遣資格　　下記の要件を全て満たす方。ただし、次の各号のいずれかに該当しなくなった場合は、派遣決定を取り消す場合がある。

① 生年月日が平成12年４月２日から平成15年４月１日までである方
② 市内に在住している方（住民基本台帳に登録がある方）
③ 派遣について保護者の同意が得られている方
④ 心身共に健康で、協調性に富み、派遣計画にしたがって規律ある行動及び団体生活が出来る方
※派遣生として決定後、健康診断書（自己負担）を提出すること。
⑤ 事前研修、派遣の全行程、事後研修及び報告会に全て出席できる方
⑥ 有効期限が令和元年６月15日以降であるパスポートを平成31年１月７日までに用意できる方
※出国審査が厳しくなる可能性があるため
⑦ 世帯の中で市税等の滞納がない方
⑧ 過去に本事業に参加したことのない方
⑨ 将来も本市の国際交流、地域活動、派遣の成果を積極的に活かせる方
⑩ 中学校卒業程度の英語基礎能力があり、簡単な会話ができる方
⑪ 米国フロリダ州オーランド市の高校生が浦安に来訪した際に、ホームステイの受け入れができる方
⑫ 市内における国際交流活動に積極的に協力できる方

（７）派遣人数　　10名
※原則、男女共に２名以上を派遣。ただし応募状況によってはこの限りではない。

（８）引率者　　３名(市職員２名、専用添乗員１名)

（９）参加費　　１人　１２０，０００円
〈参加費に含まれるもの〉
航空運賃、空港使用料、宿泊費、施設入場料、交通費、ツアーガイド料、公式行事中の食事代
〈参加費に含まれないもの〉
パスポート申請費用、ESTA 申請費用、旅行保険のオプション追加分

※ホストファミリーによっては、その他自己負担が生じる場合あり。

（10）応募方法

①応募期間

平成30年10 月1日（月）～10 月16 日（火）午後５時必着

※窓口提出の場合の受付時間は午前９時～午後５時。

※土日祝日を除く。

※郵送提出の場合は、平成30年10 月15 日（月）消印有効。

②提出先　　市役所３階地域振興課

③提出書類

・申込書…１通

・承諾書…１通

・身上書…１通

（11）選考方法

①身上書

②日本語による面接

③英語によるスピーキング

選考委員会が上記の内容をもとに審査し選考。

（12）その他

災害の発生や国際情勢の変化があった場合、また、米国内及び空港においてテロ警戒レベルが４以上の場合は、派遣生の安全を最優先し、派遣を中止する可能性あり。

（13）スケジュール

| 年 | 月 | 日 | 曜日 | 実施事項 |
|---|---|---|---|---|
| 平成30年 | 9 | 15 | 土 | 募集を「広報うらやす」9月 15 日号及び市 HP により周知 |
| | 9 | 18 | 火 | チラシを市内高校及び公共施設に配布 |
| | 10 | 1 | 月 | 応募期間 |
| | 10 | 16 | 火 | |
| | 10 | 23 | 火 | 第１回選考委員会　16：00～17：30　市役所 10 階協働会議室<br>〔主な内容〕事業概要説明・応募状況・選考基準調整 |
| | 11 | 4 | 日 | 第２回選考委員会（選考会含む）9：00～14：00<br>選考会　　9：00～12：30　　文化会館第１・３練習室<br>選考結果確認　13：30～14：00　　文化会館第２会議室 |
| | 11 | 中旬 | | 派遣生決定通知発送予定 |
| | 11 | 25 | 日 | 事前説明会・第１回研修会　9:30～16:00　国際センター研修室<br>〔主な内容〕AM（保護者も参加）事業概要説明・必要書類提出<br>ＰＭ 自己紹介・オーランドでの発表グループ分け |
| | 12 | 16 | 日 | 第２回研修会　9:30～12:00　国際センター研修室<br>〔主な内容〕オーランドでの発表ドラフト提出・リハーサル |
| 平成31年 | 2 | 17 | 日 | 第３回研修会及びＯＢ・ＯＧとの交流会　9:30～15:00<br>国際センター研修室<br>〔主な内容〕AM　結団式（市長表敬）・オーランドでの発表リハーサル・最終確認（パスポート・ESTA・保険・日程等）<br>ＰＭ　平成 30 年度派遣生とＯＢ・ＯＧによる交流会 |
| | 3 | 6 | 水 | オーランド派遣　（8泊 10 日） |
| | 3 | 15 | 金 | |
| | 3 | 28 | 木 | 市長報告・第４回研修会　9:30～12:00　市長公室・市役所 10 階協働会議室<br>〔主な内容〕市長への成果報告・レポート提出確認・報告会の説明 |
| | 5 | 18 | 土 | 青少年海外派遣事業報告会　10:30～14:00　文化会館　３階　大会議室<br>〔主な内容〕予行練習・公開報告会 |

# ７.浦安市青少年海外派遣選考委員会の設置及び運営に関する要綱

（設置）
第１条　浦安市青少年海外派遣事業実施計画に基づき、海外派遣生の候補者を審査することを目的として、浦安市青少年海外派遣選考委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（所掌事務）
第２条　委員会は、次の各号に掲げる事項を行うものとする。
（１）　青少年海外派遣生の候補者の審査に関すること
（２）　前号に規定する事項に関し必要と認められるものに関すること

（組織）
第３条　委員会は、７人以内の委員をもって組織する。

（委員）
第４条　委員会の委員は次に掲げる者を、市長が委嘱する。
（１）市職員
（２）学識経験者
（３）国際交流団体代表

（委員の任期）
第５条　委員の任期は、委嘱の日から翌年の４月末までとする。

（委員長及び副委員長）
第６条　委員長は、浦安市市民経済部長をもって充てる。
２ 委員長は、会務を総理し委員会を代表する。
３ 副委員長は、学識経験者をもって充てる。
４ 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。
５ 委員長及び副委員長に事故があるとき、又は委員長及び副委員長が共に欠けたときはあらかじめ委員長が指定した委員がその職務を代理する。

（会議）
第７条　委員長は委員会の会議を招集しその議長となる。
２ 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開くことができない。
３ 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

（報告）
第８条　委員会は、選考審査した海外派遣生の候補者を、すみやかに、市長へ報告するものとする。

（庶務）
第９条　委員会の庶務は市民経済部地域振興課において処理する。

（補助）
第10条この要綱に定めるもののほか委員会の運営に関し、必要な事項は市長が別に定める。

附　則
（施行期日）
1　この要綱は、平成８年４月１日より実施する。
（選考委員会の委員の任期の特例）

2　平成30年度において委嘱される選考委員会の委員の任期は、第５条の規定にかかわらず、平成31年５月31日までとする。

# 8.選考委員名簿

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 委員長 | 浦安市市民経済部長<br>橋　野　まり子 | 市職員 |
| 2 | 副委員長 | 学校法人明海大学<br>ホスピタリティ・ツーリズム学部<br>ホスピタリティ・ツーリズム学科<br>教授　上　杉　恵　美 | 学識経験者 |
| 3 | 委員 | 浦安市国際交流協会<br>会長　白　木　聖　代 | 国際交流団体代表 |
| 4 | 委員 | 浦安市国際交流協会<br>副会長　島　野　雅　子 | 国際交流団体代表 |
| 5 | 委員 | 浦安在住外国人会<br>会員　伊　勢　佳　奈 | 国際交流団体代表 |
| 6 | 委員 | 浦安市教育総務部次長<br>大　友　隆　司 | 市職員 |
| 7 | 委員 | 浦安市市民経済部次長<br>杉　山　正　毅 | 市職員 |

# ９.派遣生名簿

| No. | 氏名 | 学年等 |
|---|---|---|
| 1 | 伯野（はくの）　寧（ねい） | 私立高校１年 |
| 2 | 開沼（かいぬま）　瑞（みずき） | 県立高校１年 |
| 3 | 野中（のなか）　太一（たいち） | 私立高校１年 |
| 4 | 山田（やまだ）　舞（まい） | 国立高校２年 |
| 5 | 藤本（ふじもと）　真緒（まお） | 県立高校１年 |
| 6 | 武神（たけがみ）　直樹（なおき） | 私立高校１年 |
| 7 | 川瀬（かわせ）　傑（すぐる） | 私立高校１年 |
| 8 | 猪井（いい）　颯一郎（そういちろう） | 私立高校２年 |
| 9 | 平原（ひらばら）　愛理（あいり） | 県立高校１年 |
| 10 | 佐藤（さとう）　柚衣（ゆい） | 私立高校１年 |

〔随 行 者〕

団　　長　地域振興課　課長　増田　丈巳
随　行　者　地域振興課　係長　小川　博嗣
専用添乗員　加瀬　史絵

# １０.派遣生の選考

（１）選考委員会

**第１回選考委員会**

日時：平成 30 年 10 月 23 日（火）16：00～
場所：浦安市役所 10 階会議室
内容：①平成 30 年度浦安市青少年海外派遣事業実施計画について
②派遣生の応募状況について
③選考会について

**第２回選考委員会**

日時：平成 30 年 11 月４日（日）９：00～
場所：浦安市文化会館
内容：〈選考会〉
①受付
②選考（日本語による面接、英語のスピーキング試験）

〈選考会議〉
①選考会実施結果報告
②選考審査
③承認

（２）選考結果

公 募 期 間：平成 30 年 10 月１日（月）～10 月 16 日（火）
応　　募　　者：32 名
選考会参加者：30 名
派 遣 決 定 者：10 名

# 11.研修等プログラム

| 会名 | 日時 | 場所 | 内容 |
|---|---|---|---|
| 事前説明会 | 平成30年11月25日（日）<br>９：30～11：45 | 浦安市国際センター　研修室 | ①主催者挨拶<br>②自己紹介<br>③姉妹都市の紹介<br>④海外派遣の概要について<br>⑤事務説明等<br>⑥質疑応答 |
| 第1回研修会 | 平成30年11月25日（日）<br>13：00～15：30 | 浦安市国際センター　研修室 | ①団長挨拶<br>②自己紹介<br>③青少年海外派遣事業の目的説明<br>④アイスブレイク<br>⑤浦安市・オーランド市についての学習<br>⑥グループワーク<br>⑦その他連絡事項 |
| 第2回研修会 | 平成30年12月16日（日）<br>９：30～12：00 | 浦安市国際センター　研修室 | ①派遣日程説明<br>②グループワーク（ネイティブスピーカーからの指導）<br>③その他連絡事項 |
| 第3回研修会（結団式・ＯＢ・OG交流会） | 平成31年２月17日（日）<br>９：30～15：00 | 浦安市国際センター　研修室 | ①日程等最終確認<br>②結団式（市長表敬）<br>③出国にあたっての注意事項等説明<br>④オーランドでの発表リハーサル⑤ＯＢ・OG交流会 |
| 本研修 | 平成31年3月6日（水）<br>～3月15日（金） | オーランド市 | |
| 市長報告・第４回研修会 | 平成３１年３月２８日(木)<br>９：30～12：00 | 市長公室<br>市役所10階協働会議室 | ①市長への報告<br>②提出書類確認<br>③報告会の説明<br>④その他 |
| 報告会 | 令和元年５月18日（土）<br>リハーサル<br>10：30～11：45<br>本番<br>13：00～14：00 | 浦安市文化会館大会議室 | ①報告会の説明<br>②報告会リハーサル<br>③報告会本番<br>④その他 |

# 12.本研修日程表・実績

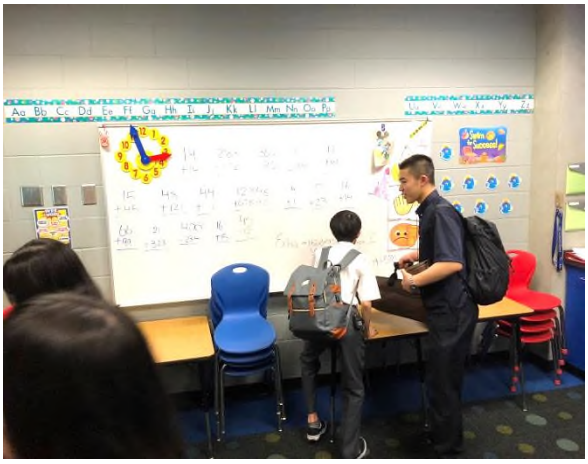
| 日　程 | 主な内容 |
|---|---|
| ３月 ６日（水） | 出発→オーランド国際空港着<br>空港にてホストファミリーと合流し、各家庭へ |
| ３月 ７日（木） | ・終日 Dr.Phillips 高校授業参加<br>・Dr.Phillips 高校で URAYASU ナイト |
| ３月 ８日（金） | ・Dr.Phillips 高校授業参加<br>・Orlando City Hall 訪問<br>・Boys & Girls Club of America 訪問<br>・UCF キャンパス訪問 |
| ３月 ９日（土） | 終日ホストファミリーと交流 |
| ３月 10 日（日） | 終日ホストファミリーと交流 |
| ３月 11 日（月） | ・Dr.Phillips 高校授業参加<br>・Starter Studio 訪問<br>・Fire Department 訪問<br>・Lake Eola & History Center 訪問<br>・History Center 訪問 |
| ３月 12 日（火） | ・Dr.Phillips 高校授業参加<br>・Beardall Senior Center 訪問<br>・Winter Park 訪問 |
| ３月 13 日（水） | ・Dr.Phillips 高校授業参加<br>・Kennedy Space Center 訪問 |
| ３月 14 日（木） | オーランド空港発の飛行機に乗り日本へ |
| ３月 15 日（金） | 浦安市役所到着、解散 |

平成31年 3月6日（水）

出発→15：00頃にオーランド国際空港着
空港にてホストファミリーと合流し、そのまま各家庭へ

## 3月７日（木）

### Dr.Phillips 高校授業参加（終日）



### Dr.Phillips 高校でのＵＲＡＹＡＳＵナイト

*〈英語による日本文化紹介〉*

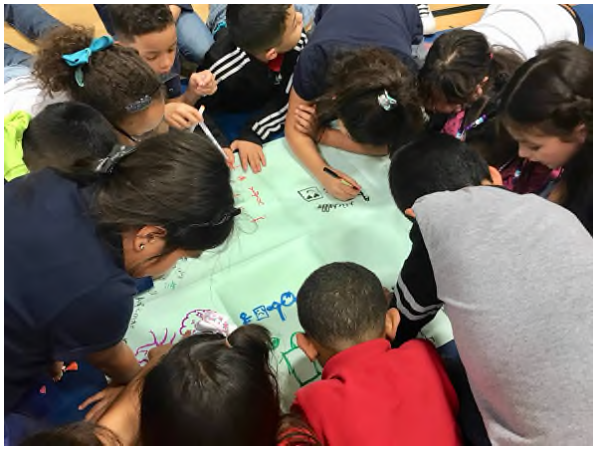
*〈日本文化体験〉*

## ３月８日（金）

### Orlando City Hall 見学及び市長・市議会議員表敬訪問

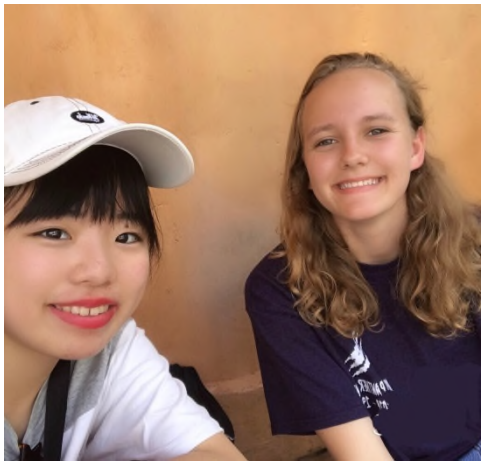
### UCF キャンパス訪問

### Boys & Girls Club of America 訪問



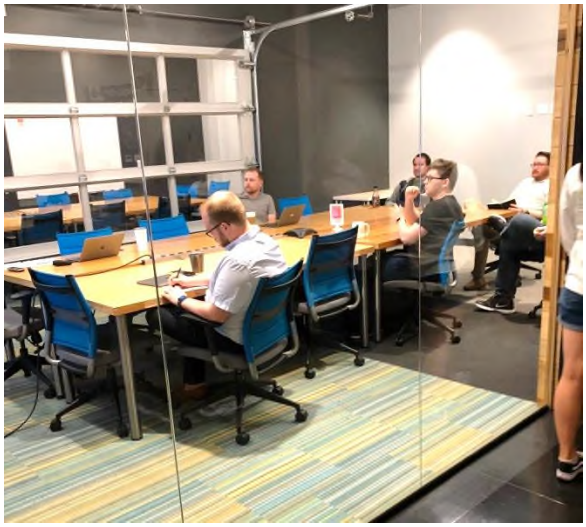
## ３月９日（土）・１０日（日）

### ホストファミリーと交流（終日）



## 3月11日（月）

### Starter Studio 訪問



### Fire　Department 訪問

### Lake　Eola　&　History　Center 訪問

## ３月１２日（火）

### Beardall Senior Center 訪問

## ３月１３日（水）

### ホストファミリーとのお別れ

### Kennedy　Space　Center 訪問

３月１４日（木）

７：００　オーランド空港発の飛行機に乗り日本へ

３月１５日（金）

１７：００　浦安市役所到着、解散

令和元年 ５月１８日（土）

## 報告会

# 13.派遣生報告

## （1）海外派遣全体を通して

伯野　寧

今回の派遣事業において私は自分の目で見ることの大切さを改めて学んだ。初めて訪れることのできたアメリカで自分の思い描いていたものがどんどん塗り替えられていく経験をした。

主に多様性に関してである。私の中で人種・性・価値観など様々な点で多様性や寛容さがアメリカは進んでいるものだと考えていた。そう考えるのはおそらく私が見たことのあるキング牧師のスピーチやウィメンズマーチ、プライドパレードの影響を受けているからだろう。実際、高校には様々な人種の人が在籍し、どの人もオープンに明るく接してくれたうえ、日本の友達とは話すことの難しい人権の話題で盛り上がることのできるホストシスターに出会えた。想像していたようにとても素敵だった。短い期間でほんの一部分しか見ることができなかったが、高校内で手を繋いで歩く異性愛のカップルはいても同性愛のカップルを見ることはなく、またアメリカは男女平等だと思っていたが、ホストファミリーの家では全部の家事をホストマザーがしていた。

このような経験から私は完璧はないのだと学ぶことができた。アメリカのように人権感覚において優れている国でも日本との共通点を見つけることができる。そして、改めて声を上げて知ることの必要性を実感できた。アメリカの高校では授業中でも活発に話し合いが行われて年齢を問わず実直に問題に向き合う姿勢を見ることができた。この姿勢はなかなか日本の高校で見ることのできないものだと思う。全ての高校がそうであるとは言わないが、少なくとも私の高校では難しい。自ら見たもので社会の雰囲気を変えるために私は声を上げ続けなければならないだろう。最後にこのような素晴らしい経験ができたのは浦安市に住む人や市の職員の方・両親・派遣生のみんなのおかげである。感謝を忘れずに自分の目で見たものを発信することを怠らず、これからも学ぶことを深めていきたい。

## 海外派遣全体を通して　　開沼　瑞

私は、今回のプログラムを通じて、少し漠然としたことにはなるが、海外における日本人としてのあり方について学ぶことが出来たと考えている。これは私がこの 1 週間でいつも考えていたことで、私にとって非常に難しいことのひとつでもあった。

まず、最初に考えた経緯として、Dr.Phillips 高校に訪れた際、出身国を尋ねられることが多く、先生に紹介される時も「日本から来てくれました」のような紹介を受けた。ここから、自分は浦安市の代表でもあり大きく見れば日本の代表なのかもしれないと思ったことがきっかけである。だからこそ毎度毎度自分の言動を回顧することが必要であると同時に、自分の行動を通じて、現地の人々の日本に対するイメージが良いものになっていると嬉しい。

次に、海外の方とどう接していくかについて私は自分の経験を通して、いくつかのことを学んだ。それは、どのような人に対しても自分らしく積極的に交流し、Yes と No をはっきり言うこと、分からないことがあったらその場で聞くことだと考える。

私は、アメリカと日本の文化の違いが最も感じられるのは、コミュニケーションの場においてだと思う。日本人はシャイと友達にも言われたが、相手のことを考えてか、ものをはっきり言わない人が多いように感じる。

しかし、それは時に相手を困らせてしまうこともある。ここから、自分の意見をしっかり持つことはとても大事なことなのだなと再認識した。

以上のように、私はこの派遣を通じて、自分の考え方に変化があり、語学面での成長はもちろん、人間的な成長にもつながったのではないかと考えている。違う文化のたくさんの人々と交流し、たくさんの意見に触れることで、物事を多面的に考えられるようになったように感じる。

今回の貴重な経験を踏まえてよりよい人間となれるようこれからも日々精進して行きたい。

## 海外派遣全体を通して　　野中　太一

派遣事業を通した 8 泊 10 日は、日本では味わうことができない出会いや刺激はもちろん、新しい発見があった。

まずは何よりも派遣メンバーだ。オーランド市内を目まぐるしく回る今回の研修を終えることができたのは、全員がそれぞれの努力と責任を果たしたからだと思う。そして Dr. Philips 高校のクラスメイト達。ホストブラザーがほぼ全ての友達に私を紹介してくれたことで、同年代同士で話せたことはもちろん、名前を覚えてくれた人までいた。少しでも彼らと時間を過ごせたことが、とても貴重な財産だ。最後にホストファミリーである Metcalf 家の４人だ。彼らの心遣いや英語、そして少しのジョークが私の心を支え、笑顔にしてくれた。

そして英語の重要性である。そんな月並みな感想を、と思うかもしれない。しかし、これは私にとって最も大きな発見である。私はこれまで英語を学ぶ理由を、単に英会話や仕事をするためだと考えてきた。ところが、Dr. Philips 高校で出会ったスペイン語を母語とするクラスメイトが私に話しかけてきた時のことだ。彼女は英語が堪能ではなく、おそらく学校で習った英文を使い、日本の食事やアニメについて尋ねてきてくれた。私の反応も不慣れだっただろうが、確かに会話をすることができた。英語は第 2 言語として世界で最も学ばれている。つまり英語はネイティブスピーカーだけでなく、無数の人と心を通わす力を秘めている。当たり前の事実だが、彼女のお陰で英語が人と人の架け橋になることを実感することができた。

これらの出会いや発見に大切なことは、自分の言葉で発信することと、挑戦する心だと強く感じる。自らの意思や考えを言葉にすることや言動を行動に移すことは英語を扱うためにも、新鮮な刺激を吸収するためにも必要だ。実際に私は、選考の面接からファミリーとの会話まで、言葉に苦戦した先で多くを学び取れた。今後も、今の場所から自分の世界を広げ、また新たな繋がりを求めていきたい。

## 海外派遣全体を通して　　山田　舞

まず、今回の海外派遣を通して感じたのは、「挑戦することを怠ってはいけない」ということだ。今、私は高校２年生だが、実は１年生の時からこの海外派遣に興味があり、応募しようと思っていた。だが、その頃は所属していたバレーボール部の大会が面接日と重なっていたり、実際にオーランドに行く期間が学校のテスト期間であったりと、応募することを諦めてしまった。しかし、１年生の夏に怪我をして試合復帰は１年後と告げられた時、すぐに応募しようと決めた。部活ができないのは本当に辛かったが、これは神様がくれた何か新しいことに挑戦するためのチャンスだ、とポジティブにとらえた。その結果、派遣生としてオーランドで最高の体験をすることができ、また９人の大切な仲間にも出会うことができた。本当にこの海外派遣に応募して良かったと思う。そしてこの思いはきっと一生忘れないだろう。それくらい今回の体験は私の人生に大きな影響を与えるものとなった。

今回訪れた中で一番印象に残っているのは Kennedy Space Center だ。もともと宇宙に興味があり、「いつか宇宙に行ってやる！」とひそかに野望を抱いていた私にとって、そこは特別な場所だった。宇宙がテーマの映画を見るたびに鳥肌が立ち、言葉では表せないような不思議な感覚に襲われるのだが、Kennedy Space Center で感じたものはそれをはるかに越えるものだった。まるで私自身が無重力空間にいるかのような錯覚を覚えた。Kennedy Space Center で目にしたものはどれもスケールが大きくて、宇宙において私たちがどんなに小さい存在であるかを改めて実感した。それと同時に、以前よりさらに宇宙に行きたいと強く思うようになった。何年後になるかはわからないが、絶対にあの地に戻り、宇宙へと飛び立ちたい、そしてあの不思議な感覚を今度は宇宙で感じたい、と思った。

ぜひまたオーランドを訪れたい。この９人の大切な仲間とともに。10日間ありがとう。

## 海外派遣全体を通して　　藤本　真緒

今回の青少年海外派遣事業を通して、２つの大切さを学んだ。

まず、１つ目は「自分から行動を起こす」ことだ。特に会話での場面で、自分の英語を正確に伝えるのがかなり大変だった。最初はとにかく聞かれるのを待っていたのだが、自分の思っていることを知って欲しいと思うようになった。ホストファミリーの方はもちろん、ホストシスターの友達や、店員さんもみんな、私が何かを伝えようとしていることを分かってくれて、それを遮ったりするようなことはなかった。行動を起こせば成長はできるし、変わることは出来るのだと感じた。逆に最初のままずっと待っていたら、何も変われなかったと思う。まだ、明らかに何か成長したのかは分からないが、以前とは違い、積極的に自分から行動を起こす気持ちになれたと思う。

そして、２つ目が「自分の意見を持つ、関心を持つ」ということだ。きっかけは、ホームステイの生活の中で尋ねられたことに、はっきりと答えることができず、もどかしいと思うことが何度もあったことだ。聞かれたのは些細なことで、アメリカに行ってみて、１日を過ごしてみての感想だが、アメリカに来ても、何かをじっくり考えるということよりも、見えているものをそのまま受け入れてしまっていた。それに気がついてから、小さなことにも興味や意見を持とうと意識をした。例えば、何か日本や普段の生活とは異なるものを見つけたら、それがどんなに些細なことでも質問をするようにした。それによって、思ってもみなかったことを知ることができた。

この派遣事業に参加して学んだことは、これからの人生でどんな場面でも生きてくることだと思う。あらゆる場面で、自分の意見を持ち、様々な意見を判断できるように成長していきたい。

## 海外派遣全体を通して　　武神　直樹

派遣事業を通して学んだことは三つある。これらは今まで考えもしなかったし、気付きもしなかったことだ。

一つ目は文法を学んだだけでは英語は全く喋れないということだ。中学で基本的な文法を一通りやっているから大丈夫だろうと思っていた。だが、全く駄目だった。大学に入るためにする勉強以外にも話すための英語も学ばなければならないと感じた。更に、自分が知っていると思っていても、意外と自分が知っていたのは一部分でしかないという事も知った。この事を頭の片隅に留めつつ英語も、それ以外のことも学んでいきたい。

二つ目は自分がいかに中身の無い人間であったかという事だ。Beardoll Senior Center での交流の時、川瀬君はトランペットを、彼と自分以外の８人はよさこいを踊った。その時、自分には人前で披露できるものが何一つとして無い事に気付かされた。これが小学生の時から高校生になるまで部活と勉強しかしてこなかった代償であった。今、日本は高学歴社会だが勉強が出来るだけの人間は求められていない。勉強以外の何かが必要なのだ、と自分は思う。だが、自分にはその“何か”が無かった。今回のこの失敗を無駄にしない為にも、人前で披露できる何かを自分の中に積み上げていくことで中身の詰まった人間となり、世界中の人と交流していきたい。

三つ目は、知らない人や初めて会った人でも困っていたら助けるという事。Dr.Phillips High School で一日授業体験をした際に、ホストブラザーとその友人の多くに助けてもらった。特に印象に残っているのは工学の時に CAD というプログラムの使い方を一から説明してもらったことだ。日本は年々海外からの訪問者数が増加しており街でもその姿を見かけるので、困っているようであれば素通りするのではなく、少し大袈裟だが救いの手を差し伸べていきたい。

これら三つのことを続けることで少しでも人間として大きく成長していきたい。

## 海外派遣全体を通して　　川瀬　傑

今回、私はこの浦安市青少年海外派遣を通じて様々な事を学んだ。

１つ目は姉妹都市オーランドの人達の優しさだ。私は英語を器用に扱うことができないのでたびたび言葉が詰まってしまったり、うまく聞き取れず理解できないことも多々あった。しかし、ホストファミリーをはじめオーランドの人達はみんな快く私を受け入れてくれた。

例えば、私が現地の高校の授業を受けている時に少しでも分からないそぶりを見せると、隣に座っていたその日初めて会った人が問題の解き方から丁寧に教えてくれた。自分の周りに困っている人がいると手を差し伸べるのは万国共通なのだなとひしひしと実感した。

２つ目は日本との学校の違いだ。私が今回授業を体験したドクターフィリップス高校ではほとんどの授業で教科書を使わない。代わりに全員がノートパソコンを持っていてそれで授業を受けたり宿題をしたりしていた。確かに日本でも私立の学校が iPad を授業に導入したりしているが、公立の学校で全員にパソコンを持たせている学校はまずないだろう。また授業も自分で選択するため時間割というものが存在しない。作曲の授業や声楽など特色ある授業が多くあった。それによって自分の夢に近道ができるのだなと思った。そして私が一番驚いたのはとても充実した施設だ。ナイター設備付きのアメリカンフットボール場や野球場などの運動施設やとても広い講堂、全てがアメリカンサイズだった。

３つ目は音楽の重要さである。私は小学４年生からずっとトランペットを吹いている。現地の学校のバンドや演奏の機会があれば披露したいなと考え、私はトランペットを持参した。実際に私は演奏する機会をドクターフィリップス高校でのプレゼンテーション、ボーイズアンドガールズクラブそれとシニアセンターの計３回演奏した。私は日本の吹奏楽の曲とアメリカの曲を混ぜて演奏した。老若男女問わず喜んでいただき、とても嬉しかった。馬の小ネタも大変うけがよかった。

この３点から私は、アメリカは物も人の心もとても大きく広いという事がわかった。

## 海外派遣全体を通して　　猪井　颯一郎

今回、フロリダ州オーランド市への海外派遣事業全体を通して、更なる異文化理解、共存、国際交流の大切さを改めて目で、肌で感じ取れる大変貴重で、刺激的な体験ができ、考えられた。

私は今まで海外にはあまり渡航せず、海外のニュースなどを見ていても、自分の住んでいる母国側の視点だけで判断、考えることが多く、お世辞にも国際的な視点を十分に持っているとは言い難く偏りがあった。しかし、今回の派遣事業の中で、日本では体験できないであろう他国、異文化の中で密接に日常の生活に関わられるホームステイでの体験は私に大いなる刺激を与えた。朝、起床してから就寝するまでの間、会話から何もかも異言語を使用して話し、生活をするのである。たった 10 日間の短い間での生活であったが、とても濃く、刺激的であったことは間違いない。私は確かに今回の派遣事業で成長し、新しい国際的な視点を手に入れられた。

この体験を自分自身だけに留めておくのは宝の持ち腐れだと思う。そのため、私は出来るだけの手段を行使し、私が感じたこと、見たことのすべてを包み隠さず広めていき、さらなるグローバル化の促進を少しで促せられれば幸いである。

今回の様な貴重な体験を、浦安市の代表として経験出来たことは沢山の方たちがサポート、アレンジをして支えて頂いたことで実現できた大変名誉な事である。支えていただいたすべての方たちに感謝をし、自分のためだけではなく人のためにも行動出来るように、より一層と努力して、成長していきたい。

## 海外派遣全体を通して　　平原　愛理

この研修で学んだことは４つある。

１つ目は、アメリカの人たちのノリだ。アメリカの人たちは、感動したりするときは盛り上がるが、心に響かなかったときは、リアクションをしない。これは、ある意味心に素直だなと思った。愛想笑いをする日本人とは違い自分に正直な文化なのだなと思った。そして、最終日に近づくにつれて、私たちもいい意味でアメリカかぶれできたと思う。

２つ目は、もう少し下調べをしておけばよかったと思ったことだ。滞在１、２日目。私はおなかを壊してしまった。なぜなら、家で出されていた水が硬水だったことを知らなかったためだ。もとからおなかが弱かったため、知らずに飲み、大変な思いをしてしまった。でもこれは、自分がしっかり下調べをしなかったのが悪かったと思う。そして迷惑をかけてしまったのに、また助けていただいた私のホストファミリーには、感謝の言葉しかない。

３つ目は、やはり英語の重要性だ。学校で習っている文法だけでは英会話能力が上がらないことを実感させられた。特に、高校生同士で話している日常会話は、とてもスピードが速くて、スラングもたくさん出てきたりした。これは、日本の英語の教科書には載ってないし、学校の授業だけでは、ネイティブスピーカーには通用しないことを改めて目のあたりにした。だから、英語の勉強方法についても考え直そうと思った。

４つ目は、かけがえのない仲間たちとの出会いだ。正直研修１日目などはみんなと仲良くなれるか不安だった。だが、いろいろな研修を経て、最終日のホテルではとっても楽しくて、帰りたくないなと思っていた。学校も全員違うし、性別だって学年だって違っていたが、それを越えてこの素晴らしい仲間にあえてうれしく思う。

８泊１０日という短い間だったがとてもためになったし、自分の気持ちが変われた充実した研修だったと思う。

## 海外派遣全体を通して　　佐藤　柚衣

今回の派遣を通して様々な面からたくさん学ぶことが出来た。特に感じた２点を下記で述べる。

１つ目は言語が違うことを理由にコミュニケーションを取ることに恐れをなしてはいけないということだ。私はこの派遣にそもそも応募した理由もスピーキングが本当に苦手でそれを少しでも向上させようと思っていたからだ。私が話せない理由のひとつに「文法通りに話さないと恥ずかしい」という意識が私の中に強くあったからだと思う。確かに文法通りに話すことは重要だが、それ以上にコミュニケーションを取ることが根本的に意義深いものであると、この派遣を終えて強く感じた。

２つ目は文化に関係なく仲が良いということだ。
実際に現地に赴く事でわかることがあるとはまさにこのことだと思う。

私の勝手なイメージで今は文化による差別はないと教科書や色んな場所で公言されていても、自分の中では少しは隔たりがあると思っていた。しかし、Dr.Philips 高校まで行くときも、途中から他の家庭の方が車で送ってくれたりと、文化の壁がなく家族ぐるみで交流をしていた。イメージだけでその価値観や世界観を狭めてしまうのは本当に勿体ない。この事を友人や家族に伝えていきたい。たくさんの文化や考え方に触れるこのような貴重な体験が 10 代のうちに出来て本当に良かった。

この派遣で学んだことを活かして学ぶことを楽しもうと思う。
最後にたくさんの関わった方々と派遣メンバーに感謝をし、この派遣で学んだことを活かし、又この経験を無駄にすることがないようコミュニケーションの幅を広げて学ぶことを楽しもうと思う。

## （2）ホストファミリーとの交流

伯野　寧

今回のオーランド派遣事業が私にとって初めてのホームステイをする機会だったこともあり、私は不安と期待、両方の気持ちで緊張していた。オーランドに到着する前にもホストシスターのイサとは連絡を取り合っていたが慣れない英語を喋ることはやはり不安であった。しかし空港で私を暖かく迎え入れてくれた時とても安心した。私のホストファミリーは母と父とイサの 3 人と犬が一匹の家族である。コロンビアがルーツで家では英語だけではなくほとんどの会話がスペイン語でされていた。そして普段の食事はほとんどメキシコ料理がメインだそうだ。様々な文化の混在が移民の国であるアメリカならではだと思い私にとって新鮮であった。

彼女と両親は私をたくさんの場所に連れて行ってくれた。到着した日には、両親で経営するお店・オフィスを案内してくれた。そこではインテリアに関する仕事をしていて、2 人が支え合っていることがよくわかる。それだけではなくここのお店は美味しいよと夜ご飯にも色々なお店に連れて行ってもらえた。週末にはユニバーサルスタジオに彼女と 2 人で行き、映画・ショッピングにも行き本当に楽しかった。私にとって楽しかったのはこれだけではなく、イサとの会話も印象に残っている。例えば、ジェンダーのことだ。アメリカではフェミニズムに対して寛容な雰囲気があり、彼女の親友である男友達もすごくフェミニストなんだよと話してくれた。そのような状況が私にとって羨ましいものであり、こうやって日本でも簡単に意見を交わすことができたら良いなと思う。また、銃規制の話もした。彼女は容易に銃を持つことができる社会は怖いと言っていた。自己防衛のために銃を持つ人がアメリカでは多いけど、年間に多くの小・中・高生の命が奪われている事実があるのだからもう少し私たちもすべきことがあると 2 人で話し合った。他には LGBTQ のアメリカ・日本での捉え方のちがい、アニメについて、人種の違いなどたくさんのことを話せたことはとても嬉しく思っている。

初めてのホームステイで私が学んだことはコミュニケーションを躊躇せずとることだ。言語の壁は私にとって大きなもので日常会話ならできたとしても、深く掘り下げたいトピックを日本で伝えられていることの 3 分の 1 程度しか英語では話せなかったことが悔しかった。もっと英語力

を向上させたいと思った。それでもやはり何か口に出さないと自分の気持ちは伝わらないからこそ行動することができた。それはホストファミリーが暖かく接してくれたからだろう。今回私を受け入れてくれて本当の家族のように扱ってくれたことで私にとって充実したオーランド研修となり幸せである。

## ホストファミリーとの交流　　開沼　瑞

私のホストファミリーは、親子合わせて４人、犬が３匹のミネソタ州からきた家族だった。

シスターのHannah は、Dr.Phillips で school color guard という、大きな旗を使ってパフォーマンスをする部活に所属していて、私が滞在していた１週間の中で大きな大会を控えていた。それにも関わらず、私に１番簡単な技を教えてくれたりと、かなり忙しい中でも交流ができて嬉しかった。また、休日には二人で Walt Disney World に訪れ、朝から晩まで一日中二人で過ごした。アトラクションの待ち時間では、日本の高校とアメリカの学校、日本の Disney とアメリカの Disney などの違いについて話したり、お互いロックバンドのＱＵＥＥＮが好きということが分かって、今考えると、長いはずの待ち時間も一瞬のように過ぎていったように感じる。

ホストマザーは、Hannah が学校で残って練習している間、たくさん日本のことを聞いてくれたり、ミネソタ州のことを尋ねたりすると喜んで全てに答えてくれた。また、彼女のアメリカに対する考え方、健康に対する考え方を聞いて、自分では考えないような新しいアメリカの一面を知り、驚いたことが多々あったと同時に、私は、彼女の芯のある生き方をとても尊敬している。

ホストファザーは、お菓子が大好きで、日本のお菓子を渡した時は、とても喜んでくれた。彼は Hannah の練習に遅くまでつきあっていることが多く、話す機会がたくさんあったわけではないが、毎朝スクールバスのバス停に行く時には、犬の散歩をしている彼に会い、いってらっしゃいと笑顔で言ってくれることが嬉しく、初めての高校体験の際も緊張が少しほどけたという思い出がある。

妹の Chelsea は、サッカーが得意で、すごく面白い子だった。特に私が好きだったのが、いつも左右違う靴下を履き、左右違う色の靴紐をつけていたことである。これは私の偏見かもしれないが、目立つことを避け、周りと一緒であるのが好きな日本では、周りの目を気にして着たい服を着ない人が多いように感じる。Chelsea のファッションは、日本に長く暮らしてきた私にとって、日本とアメリカの文化の違いを改めて感じたきっかけでもあり、自分の考えを見直す機会となった。また、彼女は工作が大

好きで、浦安ナイトのパフォーマンスでも行った、日本の伝統でもある「組紐」を家で教えてあげると喜んで夢中になっていて、とても嬉かった。

私のステイ先の Devenny 家はたくさんの優しさにあふれていて、私の不十分な英語を一生懸命理解しようとしてくれ、家族の一員と扱ってくれたことがなにより嬉しく、滞在していた一週間が本当にあっという間だった。時には宿題を手伝ってくれ、英語の日常表現の使い方等の質問など、真面目な事にもしっかり答えてくれた。今回のホームステイは、日本で勉強するのとは違い、生の英語に触れることができ、一週間という短い期間の中でも自分の英会話スキルの向上があったように感じる。

本当に貴重な一週間になった。伝えきれない感謝が溢れている。

## ホストファミリーとの交流　　野中　太一

私がお世話になった Metcalf 家の４人はとても賑やかで、私の派遣事業が充実したものになるよう様々な計らいをしてくれた。その一つひとつに細かな思いやりがあり、英語が拙い私が大きな壁に直面せずにホームステイを楽しめたのは、ホストファミリーの助けであることに違いない。

ホストブラザーである Kameryn は、空港で出会った時から別れまで、ドアの開閉１つとっても気遣いがあり、様々な点で紳士的に接してくれた。その中でも彼やファミリーに最も助けられたのは、やはり英語での会話である。私はこの派遣事業で初めてネイティブスピーカーに囲まれた生活を送り、自分の表現の幅の狭さを痛感した。スマートフォンの通訳アプリの履歴を見返すだけで、ファミリーとの出来事を思い返す程である。伝えたいことがあるのに伝えられないもどかしさは本当に辛かった。それでもファミリーは私の言葉を待ち、時には助け舟を出しながら私をサポートしてくれた。特にブラザーは私が発した英語を必ず聞き返し、完全な英語に直して会話を進めてくれたので、彼の友達と会話をするときも不自由なく、会話そのものを楽しむことができた。

そんな Metcalf 家の４人は、それぞれの生活リズムが全く異なっていたことが印象に残っている。例えばアメリカの高校の朝は早く、7:00 にはほとんどの生徒が廊下やカフェテリアで友達と時間を過ごしていた。そのリズムに合わせるため、マザーもしくはファザーが車で送迎をしてくれた。しかし当たり前だが、マザーやファザーにも仕事がある。そしてブラザーの弟は日本の中学校にあたる学校に通っている。そのため、朝はブラザーと送迎してくれるマザーかファザーだけが起き、帰ると全員が揃っているような家庭生活であった。しかしこの生活の中で私は、支え合う家族の温かさを感じることができた。それは、ブラザーが取り組んでいるラクロスやフットボールの練習場に毎日必ず応援に行くマザーの姿があったからだ。もちろん私も観戦していたが、終わると必ず労いの言葉を掛けるマザーの姿があった。全員の生活リズムこそ違うが、全員を尊重して生活する温かさがアメリカらしさであり、その温かさが強い家族の深い絆を育んでいると感じた。

　そしてもう一つ、ブラザーのスポーツ観戦をしていて気づいたことがある。それはファミリーが観客席でほとんどの人と言葉を交わしていた姿である。特に、私を含めた家族のことを楽しそうに話すマザーの姿は忘れられない。ブラザーもすれ違う数えきれない程の友人とハグや握手を交わしながら校内を行き来していた。そこで考えたことは、多種多様な人が集まるアメリカだからこそ、人と人の繋がりが大事だということだ。私も今後の生活で多くの人とも言葉を交わし、自らの手で世界を広げたいと感じた。
　そして何より、ファミリーと笑い合った時間を忘れることはできない。今後も連絡を取り続け、素晴らしい「家族」と時間を共有したいと強く感じた。

## ホストファミリーとの交流　　山田　舞

私のホストシスターの Andrea は私にとても似ていた。それは性格などではなく、環境面についてだ。たとえば 2 人とも 1 人っ子で犬を飼っていたり、Andrea はクロスカントリーとオーケストラをやっていて、私はバレーボールとオーケストラ、吹奏楽をやっていたり…そのため、初めての土地でのホームステイもすぐに慣れることができた。ホストファザーとホストマザーも「何が食べたい？」「どこに行きたい？」といつも優しくしてくれて、私もあまり緊張せずにたくさんコミュニケーションをとることができた。Andrea がテスト期間だったこともあり、休みの日はお母さんが買い物につきあってくれたり、ディズニーまでお父さんが窓を全開にして大音量で音楽を流しながらかっこいい車で送ってくれたりと、まるで本当の家族のように扱ってくれたのがとても嬉しかった。Andrea と一緒に過ごすことができて本当に良かった。Andrea は今年の 11 月にオーランドからの派遣生として浦安市に来るので、ぜひ私の家で受け入れてあげたい。今からとても楽しみだ。

ホストファミリーの家で暮らしていて驚いたことがある。私は以前、ペンシルベニア州のフィラデルフィアというところでホームステイをしたことがあったのだが、その時泊まらせてもらった家と今回泊まらせてもらった家は全く違っていた。フィラデルフィアでは、家の中はどこでも土足だったり、食事の前にはみんなで手をつないでお祈りをしたりしていた。

しかし、オーランドでは、玄関から部屋まですべてカーペットが敷かれているため、靴を脱いで生活したり、食事も全員で一緒にすることは少なく、各自好きな時に好きな量だけ食べるといった感じだった。また、フィラデルフィアの家はポツンポツンと隣の家と結構離れているのに対し、オーランドの家は地域ごとにゲートによって区切られており、似たような家がきれいに並んでいる印象を受けた。きっとこれらの違いには、フィラデルフィアは建国時の中心地であり、古くからある街で、オーランドはスペイン領だったものをあとからアメリカとした街であるといった歴史も関係しているのだろう。個人的には、土足ではなく裸足で生活するところや、あまり宗教色が強くないオーランドはとても住みやすくて良いなと思った。もしアメリカに住む機会があれば真っ先にオーランドを選ぶことだろう。

このように、今回のホームステイを通して普段私たちが暮らしている日本との違いと共通点がよくわかったので、これからさらにそのような違いが生まれた原因などを追究していきたい。そして、2020 年には東京オリンピックの開催に伴ってたくさんの外国人が日本に来ると思うので、彼らの文化を尊重しつつ、日本の文化を紹介していきたい。

この８泊 10 日はとても濃い日々だった。Carlos、Mareliz、Andrea、犬の Cupcake、一緒にディズニーに行ってくれた Sydney、Isabelle、そしてオーランドで出会ったすべての人に感謝したい。

## ホストファミリーとの交流　　藤本　真緒

私は 17 歳の女の子とお母さんの 2 人暮らしの家庭にホームステイをした。

ホストシスターの女の子は明るく、とても気遣いのできる子で、緊張している私にとても優しく接してくれた。ホストマザーも簡単な単語を使ってくれたり、楽しめるように工夫してくれたり、本当に良くしていただいた。

ホームステイをしてみて感じたことは、日本人よりもそれぞれが自分のことに責任を持つという意識を持っているということ。ホストシスターが 17 歳ということもあったが、朝ごはん、洗濯、掃除、食器洗いなどはすべて自分でやっていた。朝ごはんは学校に行く前に朝早く起きて作り、夜ご飯を食べて宿題を終えてから食器洗いをしていた。

その一方、アメリカでは運転免許が 16 歳から取れることもあり、学校までは自分で運転をして、放課後は自由に出かけることができていた。学校の後ももちろん家族は仲良く、休日は一緒に外出したりするが、夜ご飯の後は自分の時間をそれぞれ過ごしていた。

まず、バスルームは 1 人ずつあり、自分の好きな時間にお風呂に入ってその後はそれぞれ過ごす。ホストマザーは、テレビを見たり本を読んでいた。ホストシスターは、次の日の宿題や予習をしていた。平日にあまり団欒の時間が取れない分、休日は本当に充実した時間を過ごしていた。

アメリカの文化という点では多くの人が知っているように、家には靴のまま上がり、湯船は使用せず、シャワーのみ使用していた。

ただ、学校生活は想像以上だった。まず、授業の開始は学校にもよるが、朝早くホームルームなどはない。そして、先生ではなく生徒が教室を移動し授業を行う。ホストシスターに日本は大体先生が移動することを話すと、とても驚き、楽でいいねと言っていた。ホストシスターの学校は朝早く始まるため、終わりも早く 2 時ごろには終わり、放課後はそれぞれ委員会のようなものや、スポーツなどの活動をしていた。

また、授業中はとてもメリハリがあり、話し合いの授業は活発に話し、レポートを書くような時は集中していた。授業中の飲食は自由で、朝ごはんやお菓子などを食べながら授業を受ける学生もいた。

ただ一番驚いたのは先生との距離が近いということだ。1 クラスの人数があまり多くなく、先生に質問しやすい空気だった。また分からないということをバカにしたりするような人はおらず、意欲のある人がのびのびと学習のできるとても良い雰囲気だった。

今回のホームステイで、食事をはじめ、家事全般をやってくれているお母さんには本当に感謝しなければならないと改めて思ったし、もっと自立する準備をしなければならないなと痛感した。

また、日本の学校で英語を始めもっと意欲的に学習をして、またいつか会った時に自分の気持ちを正確に伝えられるように成長していきたい。

## ホストファミリーとの交流　　武神　直樹

初めてホストファミリーからメールが来たとき、インド出身と聞いたが、それ程驚かなかった。アメリカは本当に人種の坩堝なのだなと感じたぐらいだ。ホストファミリーは３人ともよく喋るにぎやかな家族だった。特にホストブラザーの Happy 君とは、アメリカを訪れる前から一週間で 20 通を超えるメールのやり取りをしていた。そのくらいよく喋る愉快で楽しい人たちだった。一番嬉しかったのは、初対面の僕を笑顔で受け入れ、家族として Happy 君やその兄の Shan 君と同様に家族として扱っていただいたことだ。残念だったのはお父さんに会えなかったことである。タイミングが悪くお父さんは不在であった。

僕のホストファミリーは多くのヒンドゥー教徒に見られるようにベジタリアンであった。（オーランドについて初めて聞かされたのだが…）ホストマザーは気を使ってお肉は食べなくていいのか？と何度も聞いてくれた。だが、日本ではベジタリアンの食事は滅多に食べられるものではない。またとないチャンスであると思いから、すべて辞退した。その上、何か食べたいものはないか？とも聞いてくれた。インドで食べて好きになったが、日本では見つけられずにいた料理やお菓子があったため、逆にこれは一度も辞退せず、むしろ色々食べさせてもらった。

特に印象に残ったのは、夜食に自分を含めた四人で Gulab Jamun というドーナッツのシロップ漬けのようなものを食べたことだ。このようなお菓子はインドにはもっとあるという。インドは熱帯に属するため暑い時は最高気温が 50 度を超えるという。このような気候の中で、食物を保存するために砂糖漬けにしたり、食欲を維持するために、スパイスを多用したりする料理が発達したのだなと思った。一週間ベジタリアンをしていたからか、出発前日のホテルでの夕食ではお肉を食べるのが少し怖かった。（さんざんお肉が食べたいと騒いでいたのは誰だ？）自分が考えるにベジタリアンになるのは簡単だが、ベジタリアンでなくなるのは少し難しいと思う。それは菜食主義者にとってお肉とは未知の食材だからである。（在印邦人のために出張者が冷凍された真空パック牛肉を小豆と偽って持っていった例がある）それだけでなく、牛が神聖視されているという事情もある。おそらく後者の方が大きな理由であろう。

ヒンドゥー教やインドに関する話もいろいろ聞いた。ヒンドゥー教は神道のように多数存在しており、その数は無数ともいわれる。一方で、実はそんなにいないとする意見さえある。それは、ヒンドゥー教の神様が複数の変身形態を持っているからである。多い神は 10 もの変身形態があるという。他には、先刻牛が神聖視されているといったがそれは瘤牛だけである。むしろ水牛は食肉として海外に輸出されているという

今回ホームステイをしてアメリカ以外の国の文化に触れることができ、とても貴重な体験となった。

## ホストファミリーとの交流　　川瀬　傑

私は今回のホームステイで生のアメリカ生活を自分の肌で感じることができた。私は過去に一度もホームステイをしたことがなく、何もわからず不安でいっぱいだったけれど、空港から明るく迎えてくれたカルドナ家のおかげでとても充実した生活を送ることができた。ここではそのうちの驚いたことや楽しかったことを紹介する。

まず初めに私が驚いたのは現地の学校生活である。私のホストブラザーのファビアンの通学手段は車だ。ほとんどの人が車を使っていて、学校の敷地内にとても広い平面駐車場があり、そこに車を停めて授業を受けていた。オーランドには日本のように電車が走っていなく、自転車を使うには距離が遠すぎる。だからみんな車を使うのだとホストブラザーが教えてくれた。実際にホストファミリーの家から学校まで高速道路を使っても３０分以上かかった。道中、朝日に照らされた湖面を見て綺麗だというと写真を撮るためにスピードを落としてくれた。とても優しい人だった。また学校の始業が早いため、毎日、日が昇るころに家を出発した。

次に休日の過ごし方についてだ。私以外のほとんどメンバーはディズニーワールドやユニバーサルスタジオなどテーマパークで過ごしていたが、今回私は観光ではなく研修でオーランドを訪れた。だから現地の人の普段の生活を知るために現地の家族が行くような場所に行きたかったので普段休日は何をして過ごしているのかという事を尋ねた。するとよくゴルフに行っていると教えていただいたので初日はトップゴルフという日本でいうゴルフの打ちっぱなしに行った。施設全体がとてもきれいで、老若男女問わずとても賑わっていた。私はゴルフクラブを握ったこともなかったけれど、とても雰囲気がよくやりやすかった。またホストファザーや隣の男性が気さくに教えてくれたので、とても楽しんでゴルフをすることができた。ただゴルフをするだけではなく、バーも併設されていてゴルフをする人もそうではない人もみんなが楽しめる施設だった。

２日目はショッピングモールに行った。とても大きいモールで一周するのに２時間近くかかった。日本では頻繁に宣伝のアナウンスが流れるが、オーランドではそれがなく、買い物に集中できた。そこでは日本にあるブランドや日本語がたくさんあったので少し日本が恋しくなった。

３つ目は食事に毎日、とても力を入れるということだ。私がホームステイしたカルドナ家は、キューバとプエルトリコのハーフの家だったのでメキシコ料理やキューバ料理を中心にとてもおいしい料理を楽しむことができた。私が行きたいと行って連れて行っていただいたハンバーガーショップ以外は全て手作りだった。気をきかせて、たまにみそ汁も出してくれた。

私はホストファミリーとの交流を通して日本との文化の違いを感じた。しかしアメリカの生活様式が決して悪いものではなくむしろ日本の家族より仲がよく感じた。また彼らと会える日を楽しみにしてこの経験を活かしていきたい。

## ホストファミリーとの交流　　猪井　颯一郎

私は、ホームステイが初めての経験で、成田空港の出発ロビーにいた時から、心の中で楽しみな気持ちと、緊張で不安な気持ちが激しく葛藤していたことをよく覚えている。その葛藤は目的地のオーランドに近づくにつれて激しくなっていった。オーランド国際空港に到着したときには、心臓が破裂しそうな程の鼓動を感じていた。しかし、ホストファミリーたちは私の顔を見た途端に笑顔になり、手を上げて近づいてきた。その瞬間、私の緊張は一気にほどけて、安心した気持ちに包まれた。

私のホストファミリーの両親は共働きで、ホストブラザーであるAarshくんと私と同じ派遣生のホストファミリーに家まで送ってもらった。海外は共働きが多いと聞いていたので実感できた。家に着くと、部屋を紹介してもらった。やはり、アメリカの家は日本の家と違い、大変大きく、部屋数も多いなと感じた。

私のホストファミリーはインド人で、父、母、兄、弟、犬の 5 人家族であった。さらに、私のファミリーはベジタリアンで、肉類は一切とらないファミリーであった。日本では、おそらく少なく、少なからず私の知り合いにはベジタリアンはいなかったので、ここでも文化の違いを感じた。

ホストファミリーとの食事は、インド人の家族だったので、インド料理が多かった。しかしその他にも、メキシコ料理も振る舞ってもらえた。さらには、インド料理の中でも伝統的な料理も振る舞えてもらい、アメリカだけではなく、インドの事にも少し触れられたので一石二鳥な気持ちになった。

平日はとても朝が早く、身支度が大変だった。学校や視察が終わり、家に帰宅して夕食を済ませると、ショッピングモールに連れて行ってもらえた。とても大きく、一つの街のような所で沢山の商業施設が建ち並んでいた。

休日は、ずっと行きたかった日本でも有名なコーヒーショップへ連れて行ってもらい、その後には、エスケープゲームという謎解き脱出ゲームをAarsh くんとその友達としに行った。私は、謎解きゲームはあまり得意な方ではなく、さらにすべて英語でのプレイだったので大変だったが、なんとか全員でクリアすることが出来た。帰りの車で聞いたのだが、Aarshくんは何回かこのゲームをプレイしているのだが、今回初めてクリア出来たと言っていて、とてもうれしそうに話してくれた。

私はこの派遣期間中にちょうど誕生日を迎えたのだが、朝起きてから、ホストファミリーやその友達、派遣生の仲間たちにお祝いをしてもらい、とてもうれしかった。

そしてお別れの時。前夜、私は寝る前、あまり涙もろい方ではなくあまり泣かないのだが、ホストファミリーたちと過ごした思い出を回想しているうちに少し涙してしまった。それと同時に必ず戻ってこようと決めた。

このホストファミリーと過ごした 7 日間は最高の思い出で、一生忘れることの出来ない刺激的な体験だった。同時に、自信をつけさせてもらえた。彼らに対する感謝の気持ちを忘れずに、これからも交流を続けていきたい。

## ホストファミリーとの交流　　平原　愛理

私のホストシスターは、昨年の 11 月に私の家にホームステイしていたため、顔見知りであった。なので、空港であったときは、再会できた喜びが膨れ上がっていた。それでも初めてのホームステイには、少し緊張していた。彼女は 6 人家族で、兄弟４人のうち 3 人は養子だが、実の子のように愛していて、異文化を感じた。日本では、あまり養子制度は見かけないため私にとっては、新鮮だった。ほかに異文化を感じたことはたくさんある。

例えば、食だ。やはり、ジャンクフードがメインで、サラダは滅多にお目にかからなかった。学校に行くときも、ホストマザーがスナックや、フルーツなどを持たせてくれたため、食べ物には困らなかった。私の友達は、逆に量が多すぎて食べきるのが大変そうだった。

また、用事がない日には、夜ご飯は家族みんなで食べていた。食べおわっても会話を楽しんだり、ゲームをしたり世間話をしたりしていた。しかし、私の英語が不自由なため、話に入れなかったり、聞き取れなかったりすることが多々あった。でもそれに気づいてくれて、やさしい言い回しにしてくれたり、私のつたない言葉を理解してくれようとしてくれた。ありがたかったが、自分の無力さを感じて、悔しかった。

学校生活では、驚きを隠せなかった。まず、朝がとても早く、終わるのも早いことだ。朝は、午前７時１５分に始まり、そして、私のホストシスターの場合だが、五時間授業を経て、午後１２時３０分ごろには帰ることができる。しかも、私たちの滞在中サマータイムが発生し、普段より、１時間早くなったことで、朝日の上らない暗いうちに家を出るのだ。とても眠かったのを覚えている。そして、何よりも、車社会なことに驚いた。アメリカでは、１６歳で運転免許をとれるので、私のホストシスターも車で、毎日登校していた。楽だなと思う反面危険も伴い危ないのかなとも思った。さらに、授業中は、飲食、スマホの利用が可能で、遅刻も別に怒られないことにもおどろいた。日本でやったら必ず怒られる。だが、これも自由な国アメリカならではの教育方法なのではないかとも思った。自分たちでブレーキをかけ、責任を持たせるためなのかもしれないと思った。

また、男女の壁がないところもいいところだと思った。みんなフレンドリーで、たくさん話しかけてくれたが、うまい言い返しができず、うつむいてしまうことがあった。しかし、これをバネにして、もっとうまく話せるようなりたいという気持ちが、より一層高まった。

この研修は、自分にとっていい意味で常識をくつがえせたと思う。また会って、多くのことを話して、一生の友達にしたい。

## ホストファミリーとの交流　　佐藤　柚衣

私のホストファミリーは私と同い年であるNaomiの他に兄が１人、姉が１人(既に自立済)、妹が２人と５人兄弟の７人家族だった。
Sassyという猫もいてとても賑やかな家庭だった。

オーランドに行く一ヶ月前からSNSでのやりとりを始めていてお互いに好きな事や、家族のことを話したり、飼っている猫の写真を送りあったりしていた。

Naomi は日本がとても好きな女の子で日本語の授業も受講していた。私の訪問をとても心待ちにしてくれていて少し不安だったホームステイの緊張も和らいだ。

空港ではカラフルな風船と共にお母さんとNaomiが出迎えてくれた。その後はスーパーに向かいこれからの朝食や、学校に持っていく昼食、スナックなどを買ってくれた。最初は自分が払うと思っていたのもありフルーツから飲み物、挙句の果てには電池まで買ってもらい申し訳なさで一杯だった。

休日の１日目は自宅で映画を１本鑑賞してからホストシスターの眼鏡を作り直すために眼鏡屋さんに行った。全く予想もしていなかったが日本とは少し異なる検査方法や類似した事をしていたりして面白かった。その後は大きなショッピングモールに行き、買い物をした。

そして、20時の映画を映画館で見る予定だったが満席。諦める雰囲気になったがホストシスターがどうしても見たいと言って 22 時からのレイトショーを鑑賞した。子供に甘く、優しいのは日本と変わらずほっこりした。レイトショー自体初で、アメリカの映画館も初。ポップコーンやドリンクはありえないほど大きくて驚いた。

休日の ２ 日目はサプライズでディズニーへ連れていってくれた。ずっと行きたかった所で本当に嬉しかったし、待ち時間に日本の文化や自分の友人についてなど色々な事を話せて楽しかった。ホストマザーは足が悪いのにも関わらず連れてきてくれてその優しさに感嘆した。朝から夜まで素敵な時間を過ごした。

他にも日本の知育菓子を一緒に作ったり、ホストシスターとテレビゲームをしたり、ホストの従兄弟と遊んだり、折り紙を教えたりとたくさんの事をホストファミリーと共にした。

移動の車の中では私でも知っているような英語の歌を全員で歌ったりして楽しかった。

最終日には"We love you."というメッセージと私の名前を添えたケーキをくれた。家族全員で写真を撮って最後の食事を終えた。その後私にまたサプライズをしてくれた。表には"We will miss you."という文字と共にこれまでの思い出をイラストにしたものが描かれてあり、裏にはDr.Philips 高校で話した Naomi の友達からのメッセージが書かれた大きなメッセージカード(A3 サイズ)をくれた。

そしてもう 1 つ、滞在中に撮った何気ないたくさんの写真をアルバムにしたものをくれた。泣かないと決めていたが本当に嬉しかったのと同時に別れを痛感し泣いてしまった。

全てに関して本当に優しいホストファミリーだった。会話でも私が言葉に詰まっても待ってくれている、コミュニケーションを取ろうとしてくれている姿が嬉しかった。

こんなにも良くしてくれたホストファミリーには感謝の気持ちで一杯で日本に来てくれた時は喜んでくれるおもてなしがしたい。一緒に過ごした 7 日間は絶対に忘れることのない素敵な時間だ。この家庭にホームステイできて良かったと心から思う。

## （３）内容別報告

### プレゼンテーション（URAYASU ナイト）　　藤本　真緒

今回の派遣では、A、B、C の３つのグループに分かれてそれぞれ日本の文化や生活についてプレゼンテーションを行った。

Ａグループは日本の高校生活について発表を行った。

まず、１日の流れを授業風景や部活動などについての画像を示しながら説明をした。

授業については、ホームルームがあることや、先生が主に教室を移動すること、授業中のルールとして携帯電話の使用禁止などがあることを説明した。これには多くの現地の方達が驚いていた。アメリカでは先生が教室で待っていて、生徒が移動するのが一般的だそうだ。

部活動についての説明では、実際にトランペットでの演奏を行った。この演出は、皆さん楽しんでいた。

Ｂグループは日本の学生について最新の流行りや文化という点で発表を行った。

まず、日本の男女学生が JK、DK と呼ばれていること説明をした。

そして、“言葉” “スマートフォンアプリ” “食べ物” “フォトジェニック” の４つの項目について紹介した。

“言葉”では３つの若者言葉について紹介し、一緒に発音してもらった。発表が終わった後、実際に使ってくれていて、より日本に興味を持ってもらえた気がする。

“スマートフォンアプリ”では Tik Tok という動画アプリを紹介し、使い方を説明した後、実際に動画をいくつか示した。

“食べ物”では、JK と DK に分けて紹介し、JK はタピオカミルクティーや抹茶、DK はラーメンを値段とともに例として挙げた。

“フォトジェニック”は「映え」という言葉が流行語大賞になったことを説明し、今日本の学生に人気であることを示した。一般的なインスタグラムを動画で紹介し、とくに JK ではプリクラが人気であることを説明した。実際にプリクラを見せて、特徴や顔が加工されすぎることなどを説明した。

Ｃグループは日本の文房具についての発表を行った。見た目がわさびや、ケチャップ、修正テープなどのユニークな糊が何に見えるか問いかけながら紹介をした。

筆箱の紹介では、プラスチックケースやぬいぐるみ型などのいくつかの種類に分けて実際の使用割合についてグラフでわかりやすく説明した。そして日本特有の書道で使う筆に絡めて、筆がより手軽に楽しめる筆ペンの紹介を行った。３つの製品の写真を並べてクイズ形式で説明をし、筆ペンで happy birthday を書く動画や、女性を描く動画を流した。これには見ている人たちも驚き、楽しんでいた。

どのグループの発表も取り上げるテーマが違っていて、見ている方たちに楽しんでいただける内容になっていた。日本のことについて、興味を持ってもらうきっかけになったのではないかと思う。

## パフォーマンス（URAYASU ナイト）　　武神　直樹

「日本の遊び」これが自分のいた班のパフォーマンステーマである。他の班も似たようなテーマであったが、日本の文化を紹介するのであるから当然のことかもしれない。

A 班は書道と独楽遊び、B 班は手押し相撲と組紐づくり、C 班は紙相撲と双六であった。

準備段階では、いろいろ試行錯誤した。最初はハンカチ落としをやる予定の班もあったが、諸事情により断念した班もいた。

紙相撲と双六を選んだ理由はいくつかある。一つは折り紙を使うということ。他には、双六で日本の四季の行事を知ってもらいたいと思ったからである。

一番苦労したのは、双六づくりである。双六を作ってくれたのは佐藤さんだ。盤面の調整に時間がかかり、マスが多すぎると時間が足りず、少なすぎるとつまらない。更に四季の行事について説明する必要もあった。

そこで、野中くんがサイコロを増やすという提案をしてくれた。このようにたかが双六一個にさえかなりの時間を要した。

他の班も組紐用の紐を用意したり、それに使う道具を自作したり、書道では墨の処理が大変なのもあって、筆ペンで代用したりと工夫していた。

この過程で思ったことや感じたこと、考えたことがいくつかある。

それは、日本語と英語の言い回しの違いに気付かず、今回の派遣で英語の指導をしてくださったパトリツィアさんに指摘されてびっくりしたことである。自分が言いたいことを他の人に伝えるという事はとても難しくて大変だとも思った。誤解を生じさせてはいけないので、とても気を使う必要がある。特に組紐を動かす場所を一か所でも間違えると大惨事である。B 班はこれを時計の文字盤を使って問題を回避していた。

本番で心掛けていたのは、自分たちも楽しむこと。楽しませる側が怖い顔をしていたら楽しいものも楽しめなくなる。実際は忙しすぎてほとんど覚えていないが、私は楽しかった。

本番では、双六と紙相撲より、駒に使った折り紙のお相撲さんに興味を示す人もおり、途中から臨時の折り紙講座を開く事になった。折り紙については、Boys and Girls Club of America のパフォーマンス用の折り紙を見せたときも、あっという間に周りを取り囲まれ、約 400 枚あった折り紙が 14 枚まで減るほどだった。

更に子供たちは折り紙の上に筆ペンで文字を書いてほしいというくらい、日本の伝統文化が好評であった。

少し残念だったことは、アメリカの遊びや伝統文化に触れられなかったという点である。アメリカは歴史の短い国であるからかもしれない。

人前で何かについて説明するというのは、外国語を学ぶ上でとてもよい方法だと思った。それは生きた言語に時価で触れられるからである。誰が聞いても分かるような文章にしなければならないし、自分が喋らざるを得ないからである。

今後このような機会があれば積極的に参加して、英語だけではなく、日本語で話す力も身に着けていきたい。

## Dr.Philips 高校の授業参加　　佐藤　柚衣

この派遣で私は、Dr.Philips 高校の授業を１日目は全授業、その他の日は１時間目又は２時間目までと５日間で計 12 回の授業に参加した。特に感じた２点を下記で述べる。

１点目は無駄な時間が少ないことだ。

授業開始は７時 20 分と早めのスタートで、終わりは 14 時 20 分と 50 分授業を７コマ行う。

アメリカの高校では日本と違い、決まったクラスが設けられていないため、生徒が受講する授業が行われる教室へ移動しなければならない。その移動時間を含めた授業と授業の間はなんと６分。

Dr.Philips 高校は敷地が広大であるため、移動にも時間がかかり、実際に移動に要した時間は４、５分といったところだった。その後授業準備をしてすぐに授業が始まる。

日本では、生徒がクラスを移動しないのにもかかわらず、授業と授業の間が 10 分もあり、授業の準備をして残りは友人と話したり、騒いだりと無駄な時間を過ごすことが多いと感じた。

体験する前は 10 分も短いと思っていたが２、３分で十分だと思うようになった。

授業は、日本のように先生が書いた内容を生徒が板書するという光景は全く見られず、あるとしても答えや公式、自分が必要に応じてメモをすることくらいだった。

また、ほとんどの授業においてパソコンの画面をプロジェクターで映し出していて、授業の進度もそれなりに速く効率的であった。50 分間であるのに内容がとても充実していた。

２点目は生徒に全てを委ねていることだ。

本当に何もかもが自由であった。日本では当たり前にある学校側が決めた時間割などはなく、Dr.Philips 高校の生徒は自分が取りたい授業を７コマ決めてそれを毎日繰り返していた。

私のホストは一限が世界史、続いて日本語、美術(イラスト)、美術(工作)、英語、生物というスケジュールだった。

私の時間割をホストに見せたところ、「あなたはなんてハードスケジュールをこなしているの！」と驚かれた。

これまで与えられた授業をやってきていたが、Dr.Philips 高校の生徒は自

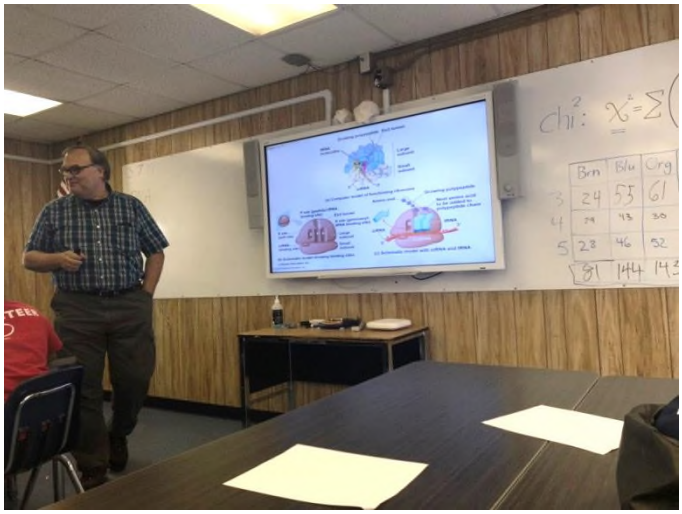
分で学びたい授業を決めて学んでいて、授業に対する意識の違いがあると感じ、すごいなと思うと同時に羨ましいとも思った。

また、日本では授業中に授業以外の行為をするのは禁止されていることが多いが、Dr.Philips 高校は授業中に寝ていても、飲食をしていても怒られることはない。立ち歩く、ゲームをする、そもそも出席しないなどの行為も怒られることはない。

しかし、日本語のクラスについては、お喋り、飲食、立ち歩くなどの行為は禁止していたことが面白かった。

全てが自由で自分のしたことが全て返ってくる環境だったと思う。
自由な反面、落ちぶれようと思ったら簡単にそれができて周りからの救いがないとも感じ少し怖くなった。

今回、日本の高校とは施設や考え方、色々な部分で異なるアメリカの高校の授業を体験できて良かったと思う。自分の考え方を見直す貴重な体験になった。



## Orlando City Hall　　野中　太一

オーランド市庁舎は、Dr. Philips 高校周辺の住宅地やディズニーワールド等の観光客が集まる地域からは少し離れた都市部に建てられている。現在、市庁舎は改修工事が終盤に差し掛かり、多くの設備が新しくなった状態を見学することができた。

私は事前の仮テーマとして、行政計画の違いを挙げていた。

例えば浦安市の計画には「災害対策」「コミュニティの推進」等、地域に着目したものが目立つが、オーランド市では「ホームレスの減少」「雇用の充実」等、個人個人に着目したものが多い。そういった点から、行政の中身と違いについて自分なりに学び取りたいと感じていた。

大きな違いの一つに、市議会が挙げられる。市議会は市長を含めた 7 名で構成されており、事前に申し込みをすることで、一般市民も議会に申し立てをすることができる。浦安市の 21 名と比べると議員の人数の少なさに目が行くかもしれないが、市の職員全体で見ると警察、消防署を含めて 3200 名が在籍しており、浦安市全体のおよそ 2.5 倍に相当する。具体的な職務については、アメリカは教育が郡（市と州の中間に位置する組織）の管轄になるので、治安維持や公共事業、交通機関等が挙げられる。また、市の管轄にはオーランド国際空港等も含まれており、世界有数の観光都市ならでは、と感じた。

しかし、バディ・ダイアー市長によると観光客のほとんどはディズニーワールド等がある地域へ出向き、都市部に来ることは滅多にないと言う。

そのため都市部にはStarter Studioを始めとするビジネス施設が建てられ、起業家のサポートや、州立大学（UCF）の学生のインターンシップを促せるようになっていた（UCF でビジネスと教育を学ぶ学生は、都市部のキャンパスを使用している）。

また、以前使用していたアリーナや市が保有している土地などを使うことで都市部を有効活用する計画について教えてくださり、オーランド市の今後を知ることができた。

この他にも市が力を入れていることの一つに、ホームレスの減少がある。アメリカでこのような暮らしをしている人たちは55万人にも及び、フロリダ州全体でも 3 万人近くが不安定な生活を送っている。オーランド市では退役軍人のサポートから始まり、実に 5 年間、支援にフォーカスを当ててきたという。その成果は今まさに現れ、実際に多くの人に安定した生活を提供できている。

そんなダイアー市長は任期17年目を迎える政治家だが、とても気さくな印象を受けた。過去には浦安市を訪問したこともあり、盆踊りを踊ったこともあると言うから驚きだ。また、日本に来て自転車の多さに衝撃を受けたと言う。私も帰国して道を歩くと、確かに自転車が多いことを感じた。車での移動が中心のアメリカから見ると、軽やかに進む自転車は印象に残るのだろう。実際に今、オーランド市ではシェアサイクルの取り組みが始まっている。

今回の市庁舎見学では、市長の他にも議員の方や秘書の方からお話を伺う機会もあり、オーランド市の中核を、様々な観点で捉えることができたと思う。その中で共通していたことは「繋がり」を大切に思う信念だ。先述した他に市長は、日本とオーランド間を結ぶフライトの直行便の実現を目指していた。また、お話を伺ったロバート議員の事務室には、浦安市の少年野球チームとの思い出の品々が飾られている。

このように場所と場所の繋がり、人と人の繋がり、人と場所の繋がりを、市庁舎で働く方の言葉や今までの歩み、これからへの思いから感じ取ることができた。最初に行政の違い、と書いたが、フォーカスを向ける対象が異なるだけで、人の暮らしを豊かにしたいという信念は変わらないのだと思う。そして、浦安市とオーランド市の「繋がり」を自分自信で体感できたことは有意義だと感じている。この信念を自分の中に吸収し、活かしていきたいと思う。

## University of Central Florida　　開沼　瑞

セントラルフロリダ大学(以下 UCF とする)は、1963 年に設置された、オーランドに本部を置くアメリカの州立大学である。フロリダ州に存在する 11 州立大学の一つであり、研究機関としても盛んであるという。

この大学は、NASA のあるフロリダ州東岸拠点に近いオーランド地域に、軍需関連産業への人材供給需要がある点に着目し、理工系大学として、フロリダ技術大学として設置された経緯がある。そのため、理工系学部や工学研究分野に強みを持つ一方、地の利を生かした観光関連学部の急成長や医学部設置が認可される等、総合大学として発展し、学生総数ベースでの規模では在学生数は 6 万人を超えて、テキサス A&M 大学に続くアメリカ合衆国第 2 位となっている。

実際訪れると本当に規模が大きく、一日かけても全部は回り切れないと思った。

しかし、中には多いクラスもあるのかもしれないが、平均的な一クラスの人数は 28 人と、日本の普通の大学では考えられないほどの少人数で、まるで高校のようだなと感じた。

そしてこの広大な UCF では、主に機械学、ビジネス学、ホスピタルマネジメント、心理学、コンピュータ科学、看護学、生物科学の専攻が多いようで、ここからもこの大学の特徴を感じた。

続いて、中央アメリカを除き、どこの国の卒業生が多いかというと、一番割合が高いのがアジア(82%)で、次にヨーロッパ(5%)、そのあとはアフリカ、北アメリカとなっている。ちなみに、現在 UCF で勉強している日本学生は 16 人である。その中の 3 人から実際に話を聞くことができ、とても興味深いものであった。

ここから、日本の大学とアメリカの大学を比較する。

まず、入試について、日本では一般入試がメインで、入学試験の得点が合格の基準であることに対し、アメリカでは試験はなく、高校の成績や課外活動、面接等で入学が決定する。これが、学生数が多い一つの理由なのかなと思った。

次に、卒業について、日本では、約 91%が卒業していて、比較的簡単だと言われているが、アメリカは約 54%、つまり二人に一人が卒業できないという。

私は、この入学と卒業の違いが、一番大きな違いだと考える。

次に、家庭での学習時間について、日本では、57%が 1 週間で 1～5 時間に対し、アメリカでは 75%は 1 週間で 6 時間以上勉強しているという。これは、上記の通り、入学試験勉強からの解放、そして卒業の難しさから考えて当然の結果だと感じる。

最後に、25 歳以上の入学者について、日本では、約 2.7%、アメリカでは約 24%であるという。これに関しては初耳だったため、個人的に一番驚いたことである。

以上のように、入学から卒業までを考えると、日本の学生とアメリカの学生とではかなり違う大学生活を送っているのではないかと思われる。

また、特に面白かったのは、UCF 内の池の話である。UCF にはとても大きな池があり、普段学生は入らないが、卒業するまでに何度か入るという。

まず、年一回カウントダウンで 0 になった瞬間に入るのと、最後には、卒業した時に入るという。あまり詳しくはわからなく、記憶が曖昧な部分はあるが、すごく面白そうだなと思った。

卒業したらできることと言えば、もう一つ、大学構内に大きな UCF のロゴが床に描かれている場所があった。しかしそこを踏むと卒業できないというジンクスがあり、現在は周りにロープが張られており、入れないようになっていた。つまり、卒業したら入れるという訳である。ここで写真を撮ることが、卒業した証明になるという話を聞き、興味深かった。

他にもプールやジム、レストラン、ショップなども充実している上、勉強環境が整っていて、すごく羨ましいなと感じた。

ただ、だからこそ、埋もれることも飛びぬけることもできると聞き、改めて自分の大学入学試験に向けて勉強に励もうと思った。

## Boys & Girls Club of America　　山田　舞

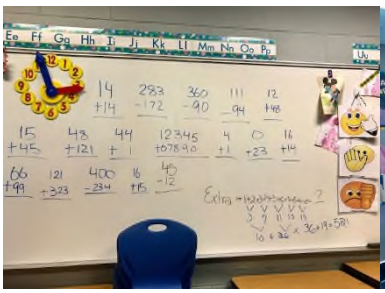
この施設は日本でいう学童のような、子供たちのための施設である。

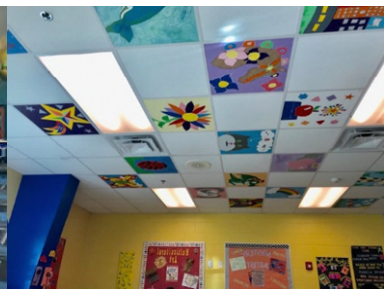
しかし、日本の学童と違うところがいくつかある。

１つ目は幼稚園生から高校生まで利用可能であるところだ。日本の学童は多くが小学生を対象としていて、それぞれの小学校に隣接している。しかし、この施設は学校を問わず、高校生まで使うことができる。

２つ目は規模が大きいところだ。この施設には、１日平均 11～18 歳の子供たちが 180 人、幼稚園生～小学生の子供たちが 120 人も訪れるそうだ。日本に比べて治安が悪いので、アメリカでは小学生以下の子供は家に １ 人きりになってはいけないという決まりがある。そのため、多くの子供たちがこの施設で放課後を過ごすのだ。

３つ目は「教育」をメインに行っているところだ。日本の学童はどちらかというと働く親が仕事の間、子供を預けるための施設と考えられているが、この施設はただ預かるのではなく、子供たちに社会教育をするための施設として作られたものである。教育を受けるチャンスのない子供たちのために様々なプログラムを開催し、技術を身につけられるようサポートしているのだ。たとえば、幼稚園生に計算の練習をさせたり、小学生に履歴書の書き方を学ばせたり。それによってか、まだ小学生、中学生なのにとても大人びて見えた。もちろん、勉強するだけではなく、卓球やビリヤード、シアタールーム、スタジオなどたくさんの設備が揃っており、子供たちは楽しみながら過ごすことができる。





私は、この施設を訪れて「日本にもほしい！」と強く思った。日本に住む子供たちは、友達の家が近い、遊ぶ場所がたくさんある、ということもあり、このような施設はあまり多くない。

それは、たしかに治安が良い日本ならではのことであり、素晴らしいと思う。しかし、そのようにいつも同じ学校の同じ学年の子と遊んでいては交友が広まらない。そして社会について学ぶ場も少なくなってしまう。

そこで、日本も Boys & Girls Club of America のような施設を作り、子供たちを積極的にそこで遊ばせることによって、新たな出会いが生まれ、性別も年齢も異なる人と交流するうちに、自然と社会勉強をすることができるのではないだろうか。

幼稚園生や小学生は早いうちから勉強を始めることで脳が発達し、賢い子に育つだろう。中学生や高校生は自分より小さい子たちの面倒を見ることで、自立できるようになるだろう。

Dr. Phillips 高校での授業体験やホストファミリーと過ごして実感したのは、自分の幼さだ。向こうの高校生たちはみんな夢を持っていて、その夢に向かってすでに動き始めていた。それなのに、私はまだ大学でやりたいことすら決まっていない。このようなアメリカと日本の高校生の違いの原因はきっと幼少期の教育にあると思う。

日本もアメリカを参考にして、早いうちから勉強も含めて様々なことを子供たちに経験させ、より「大人な子供」を育てていく必要があるだろう。

この Boys & Girls Club of America で行ったプレゼンテーションとパフォーマンスは、子供たちに日本を紹介するだけではなく、私たち自身の成長にも繋がるものとなった。子供たちとの会話は、「海外派遣の醍醐味を味わえた！」という達成感を生み出してくれた。何と言っているのか聞き取れなかった子もいたが、必死に私たちに訴えかけている姿勢から子供たちの気持ちは伝わってきて、それに対して私たちが真剣に答えてあげると子供たちも喜んでくれる。たとえ言葉は通じなくても、心で会話することができるということを証明できたのではないだろうか。

今回出会った子供たちが立派に成長して、また再開できる日が楽しみだ。それまでに私も夢を持たなくては…

## Starter Studio　　伯野　寧

Starter Studio とは簡単に言うと「新たなアイディアをもつ活発な起業家のためのイノベーションハブ」である。私は最初この施設を調べ始めたとき具体的に何をする施設か分からず少し戸惑っていた。

しかし、実際に訪れたことで私が学ぶことのできた、この施設の素晴らしい点をいくつかあげていきたいと思う。

まず Starter Studio の基本的な構造を説明していく。起業家がこのスタジオに自分のアイディアを持ってくる。アイディアとは、主に行政の改善やアプリの開発などテクノロジーを元にしたものだそうだ。例えば、We Chat のように 10 億人が利用するアプリなども誕生している。そして、スタジオからメンター、ビジネスアドバイザーを提供する。そこから 3 ヶ月でアイディアを元にプロトタイプを作っていく。6 ヶ月でマーケティングを行い、そこで顧客を得ることに成功したら製品開発を始めるのだ。ここまでは無料でプログラムを受けることが可能である。大体社員が 10 人以上になったら新たに自分のオフィスを構えてひとり立ちするが、基本的には 3 年程度このスタジオからの支援を受けるそうだ。また Starter Studio は非営利団体であり、これらの起業家支援のための費用はスポンサーである政府機関や企業からの資金・スペースの貸し出し料で賄っている。

そして次にこの施設の魅力についてである。私が 1 番驚いたのは、スタジオで支援をするにあたって起業家は年齢だけではなく国籍も問わない点だ。時には私たちと同い年ぐらいの学生や一度は退職した元会社員の方、加えてブラジルやヨーロッパからなど様々な人が起業のために訪れてくることがある。

また、スタジオでは起業家の貧富の差も関係ない。テクノロジーを元にするアイディアだけではなく、資金不足で美容院を構えられない美容師の支援などのスモールビジネスでも積極的に受け入れている。様々な人がいるので、ここにいる起業家はお互い助け合いながら高め合っているそうだ。このように世界を良くしよう、格差をなくそうと社会のあらゆる問題を解決していくために、1 日 10 人ほどの人がこのスタジオを訪ねてくる。社会のために自分が何かしたいと思ったときにそれをすぐ行動に移せるような場所があるということは素晴らしいことだなと思った。

恐らくこれは人を年齢や学歴・業績で人を見るのではなくその人の気持ちを尊重する文化が根付いているアメリカだからこそ成り立つものであるのだろう。

日本では 87%の人が会社員として働き、まだまだ起業する人の割合は少なくなっている。それは起業に伴うリスクを危惧してのことだと思うが、もし Starter Studio のように手厚い支援とともに助け合いの雰囲気がある場所がもっと増えたり、今ある施設が認知されるようになれば解決すべき問題に真剣に向き合う機会が増えるのではないだろうか。

‘No dream is too big’　「叶えるのに大きすぎる夢はない」これは今回 Starter Studio の職員の方が教えてくれた言葉だ。どんなに人が動いて努力しても全ての問題が解決されることは難しいが、向き合い行動する人がいるからこそ今の私たちの生活があるのだと思う。

起業という行動を起こすための土台となる場所を実際に見ることができて、新たな視点から物事を見ることができた。

日本だけではなく様々な国で思いを持つ人が報われる社会にするために私たちの努力が必要である。

## Fire　Department　　猪井　颯一郎

まず、オーランド市には 17 の署（ステーション）が存在し、今回は市内最大であるステーション 1 の見学をさせて頂いた。

施設を訪れると、まず目に飛び込んできたのが、黒色と赤色を基調とした大きな消防車だった。日本の消防車とは一回りほど大きく、見た目もお洒落かつ格好良かった。ちなみに消防車は、はしごが付いていると Fire truck、消防活動をする車両を Fire engine と呼ぶそうだ。

施設に入ると、入り口の真横に大きな鐘がおいてあった。昔は火事などが発生した際に誰かが鐘を鳴らして火事があることを周知して出動する習慣があったのだが、悪戯が多くなってきてしまったため、今では象徴として中に設置してある。

入り口には、大きな大理石のタイルが壁一面に埋め込まれてあった。このタイルは昔のステーション 1 からそのまま持ってきたもので、このタイルには、消防士への感謝の意や殉職してしまった方々への追悼の意が込められている。

また、9.11 のワールドトレードセンタービルの倒壊した破片の一部が展示されており、当時対応して殉職してしまった消防士の方たち 343 名の名前が刻まれ、アメリカ国旗の形になっている旗が展示されていた。

さらに、記憶に新しい 2016.6.12 にオーーランドで発生したパルスクラブ銃乱射事件の時に駆けつけたファーストリスポンダー（何かあったときに最初に駆けつける人たちのこと。ここでは警察官や消防士の方たちを指す。）の方たちへの感謝の意が込められて作成された物も展示されている。この事件の際に、現場から近かったステーション 5 が最初に駆けつけた。

入り口の奥に行くと、EMS ルームという 911 コール、日本で言う 110 番通報を受理する部屋があった。部屋の外にいても緊張感が伝わってきた。

さらに奥に進むと、いつでも持ち出せるように医療器具が管理された部屋、レストルーム、調理室、シアタールームが備わっていた。　オーランド市の消防士たちは、24 時間働いて 48 時間休息をとる勤務態勢で、比較的に娯楽が充実していた。

調理室には、”THE BIG HOUSE” と書かれたスローガンがあった。ステーションごとに呼び名が付いているらしく、ステーション 1 は市内で一番大きい署で、みんな大きな家族だという意味をこめて付いた名前であるそうだ。

私たちに笑顔で対応してくれていた隊員は、911 コールが入ると真剣な顔つきに変わり、速やかに出動していた。隊員たちは、出動するときに重さ 80～85 ポンドにもなる消防服に加え、器具などをわずか１分以内に装着し出動していく。ちなみに、消防士の階級はヘルメットの色で判別できるようで、上から白色はチーフ、赤色は副チーフ、黒は一般隊員となっている。

消防には、ダイブチーム、放火･爆発を専門とするMAST、ガスなどの危険物に対応するハスマットチーム、生物被害に対応する部隊などの専門部隊が存在する。

オーランド市では、湖や川などの水場が多いため、車が何らかの拍子で水没するなどの事案が多く、ダイブチームの出動は意外にも多いようだ。

今回、署内を案内してくれたダンさんはスペシャルチームに所属していたのだが、任務中に大けがを負ってしまい、今は現場から離れて仕事をしていた。

消防士は、いつ何時でも命を駈けて救命し、危険と隣り合わせである。ただ、その姿はまさにヒーローであり、皆の憧れの的である。

忙しい中、終始案内をしてくれたダンさんを始め、すべての消防士の皆さんに感謝の意とこれからの御無事をお祈り申し上げたい。

有難うございました。

## Beardall Senior Center　　平原　愛理

今回私が担当したところは、Beardall Senior Center というところである。施設は、比較的綺麗で、いろいろな設備があり、広いなと感じた。芸術をする部屋や、フィットネスをするジム。シニアの方が集まって、娯楽や、会話などを楽しむ憩いの場などもあった。

美術室は、何時にきて作業してもいいとのことだった。私たちが訪問した時は、３人のシニアの方が、油絵を描いていた。とても素敵で、画家の方が描かれたものと見間違えるほどだった。

次に、ジムに行った。ここで驚いたのは、ジムなどの施設に入るとき、わざわざ年齢を確認されないそうだ。年齢を聞くことは、失礼にあたるそうだ。あまりにも若い場合だけ聞くそうだ。これも、差別をしないアメリカだからだとのこと。

以前、私の家の近くにある総合福祉センターに訪問した時に、いろいろな娯楽の施設があったことを覚えている。Beardall Senior Center にもあり、私たちが訪問した時には、トランプゲームなどをして楽しんでいた。これらは、日本の老人ホームと似ていると思った。国が違っても行っていることが同じなんだなと感じた。

また、この Beardall Senior Center は、家と家の真ん中にあり、一人暮らしの方が周りに住んでいるので、通いやすいとおしゃっていた。

この施設は、５５歳から入居が可能だそうだ。曜日によってプログラムが決められていて、私たちは、水曜日、１０：００からのラインダンスに参加した。

なぜラインダンスなのかというと、このダンスは、パートナーを必要とせず、一人でも楽しむことができ、あまり難しくないためである。講師の方は、ボランティアだそうで、とても驚いた。

はじめは簡単なステップからはじまった。そして徐々に難しくなりだした。覚えるのに苦戦していたら、周りのシニアの方から、ステップを教えていただき、できるようになった。とてもありがたかったし、しっかりコミュニケーションをとろことができていたと思う。

ここでもオーランドの人は、やさしさがあるなと感じた。知っている歌が流れたときには、研修生たちもノリノリとなり、ラインダンスを楽しんでいた。

また、休憩中には、手作りのクッキーや、チョコレートなどをくださり、私たちにふるまってくれた。とてもおいしくて、ほっぺたがおちそうだった。あまりの美味しさに、お土産にたくさんのクッキーを持ち帰るほどだった。本当に美味しかったので、また食べたい。

シニアの方の中には、日本語を少ししゃべれる方がいたり、浦安市のベイシティマラソンのＴシャツを着ている方もいて、より親近感がわいて、うれしかった。ここでも、浦安とオーランドの姉妹都市というのを実感させられた。

ラインダンスの後は、即興で浦安の「ソーラン節」をおどった。練習をしていなかったため、完璧には踊れなかったが、シニアの方に喜んでいただけて、うれしかったし、自分たちなりのパフォーマンスができたと思う。だが、研修生たちは、久しぶりに踊ったので、筋肉痛になった人も多かった。

シニアの方たちが元気でいられるのも、このBeardall Senior Centerのおかげだと思った。これから、少子高齢化が進んでいくと思うが、そうなればこの施設の重要性はさらに増すと思う。なので、今回とてもいい経験になったと思う。わたしも老後オーランドに住んでいたら、利用しようと思う。これからも、老後の時間を有意義に使い、浦安との交流を深めていってほしいと思った。そして何よりも、長生きしてほしいと思った。

また会いたい。

## Kennedy Space Center　　川瀬　傑

まず、ケネディスペースセンターについて感じることは、とにかく広いということだ。敷地は５５キロメートル×１０キロメートルと日本では考えられないスケールだった。ちなみに浦安市は４キロメートル×４キロメートルの四角に収まる大きさなので、どのくらい大きいかは聞くまでもないだろう。

私はケネディスペースセンターを自分の目で見るまでは、日本でいう科学未来館のような博物館だと考えていた。しかし、ケネディスペースセンターは全ての入場者が笑顔で帰れる賑やかなテーマパークの１つだった。

まず、入場者は少し小さなシアターでスペースシャトルの制作秘話の映像を観ることができる。それを見終わるとスクリーンの下の扉が開き、次に前にも後ろにも上にもスクリーンがある部屋に入り、スペースシャトル打ち上げまでの映像を見せられる。その映像も終盤になり地球から飛び立つ映像が流れると直後にスクリーンが上に開き、2011 年に打ち上げられたスペースシャトル、アトランティス号が現れた。このテーマパークに匹敵する演出に、私はこのケネディスペースセンターのビジターセンターに足を踏み入れてすぐ心を動かされた。

次に、バスツアーでロケット発射台などを見学した。NASA だけではなく SpaceX やボーイングなど民間企業の施設もたくさんあった。バスツアーでは、途中、アポロ・サターン５センターという施設に立ち寄る。そこにはサターン５の実物が展示されていて、その大きさを間近で感じることができる。エンジンだけでも人が３人分くらいありそうだった。

月の石を触れるコーナーでは、実際に月の石を自分の手で触ることができる。月の石が大阪万博にきたときは、人で溢れていたらしい。実際に私も触ったが表面がタイルのように加工されていてあまり月を感じることはできなかった。

展示室ではアポロ 14 号の司令官や初めて月に足を踏み入れた 3 人の宇宙飛行士の手形、さらに宇宙服のプロトタイプなどが展示してあった。

当時人類が初めて月に降り立ったという事実は新聞の一面を飾るレベルのニュースだったに違いない。

このアポロ・サターン５センターには当日の世界各地の新聞が飾ってあり、日本の毎日新聞では「いま月を踏んだ」という見出しの記事が飾られていた。世界各国の新聞が飾られているなか、日本の記事を見つけたときは感動を覚えた。それを見終わるとバスでまた元の場所に戻り、自由行動となった。

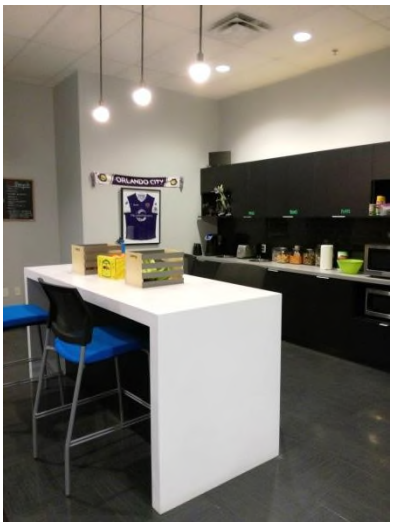
ケネディスペースセンターには、体験できる展示品が数多くあり、スペースシャトルの打ち上げ時の角度が体験できるアトラクションや国際宇宙ステーションのアーム操作のシュミレーター、スペースシャトル着陸時の重力を体験できる滑り台などがあった。

特に滑り台では小さい子供から、おじいちゃんおばあちゃんまで気軽にスペースシャトルを体験することができる。

また、imax を備えた映画館など、とても大掛かりな施設も多く１日を飽きずに過ごせる場所だった。

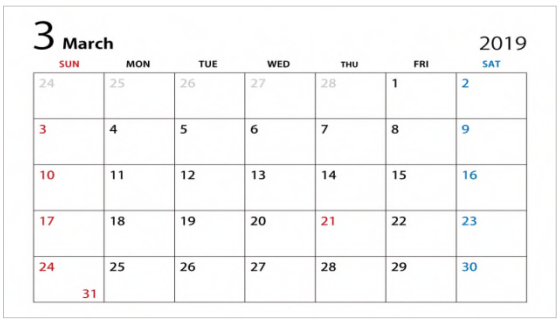
他には、スペースシャトルの事故で亡くなった人の遺品が展示してある部屋もあった。その部屋にいるだけで何も知らない私も涙が出そうになった。日本には、このケネディスペースセンターのように宇宙を間近で感じられる施設はあまりないので、とても貴重な体験になった。

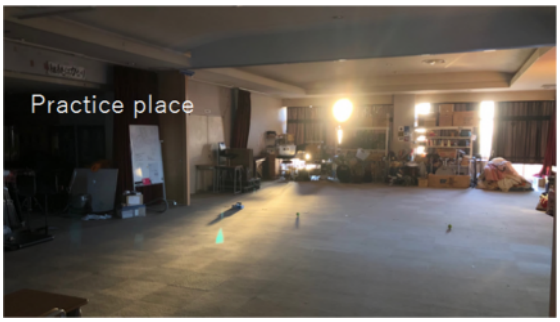
このケネディスペースセンターで、私はアメリカの宇宙にかける情熱や、それを多くの人に広めようとする思いを感じた。また日本の博物館と違って体験できるものや触れるものが多く誰もが宇宙に親しみやすい施設だと感じた。

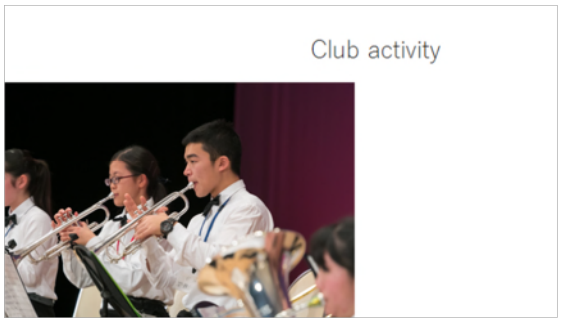


# 14.英語による日本紹介　各グループの発表資料

## Group　A　山田　舞、川瀬　傑、平原　愛理







Cram school

THANK YOU
FOR
LISTENING AND
WATCHING
MY PRESENTATION
KeepCalmAndPosters.com

Group　B　猪井　颯一郎、伯野　寧、開沼　瑞、藤本　真緒

**Teenagers**

Nei Hakuno　Mizuki Kainuma

Soichiro Ii　Mao Fujimoto

JK

DK

Joshi → GIRLS

Danshi → BOYS

Koukousei → HIGH SCHOOL STUDENTS

1.Words frequently used among JK

2.Popular apps

3.Food

4.Photogenic

Words frequently used among teens

MA

ま

It means like …

✓Really!?

✓ Are you kidding?

RI

り

It means like...

- ✓ Sure.
- ✓ OK!
- ✓ All right.

YABAI

やばい

It means like...

- ✓ Oops!
- ✓ I messed up!
- ✓ Awesome!

Popular apps

More than 75% of teens know or use TikTok

Food

Boba tea

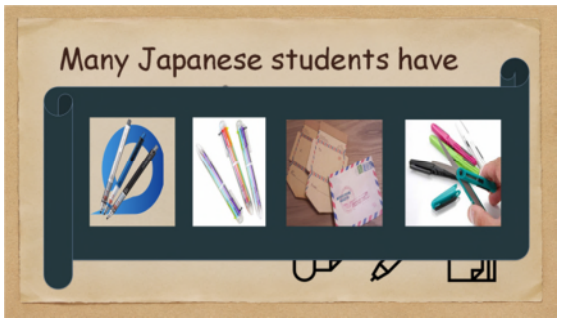
About $4.50

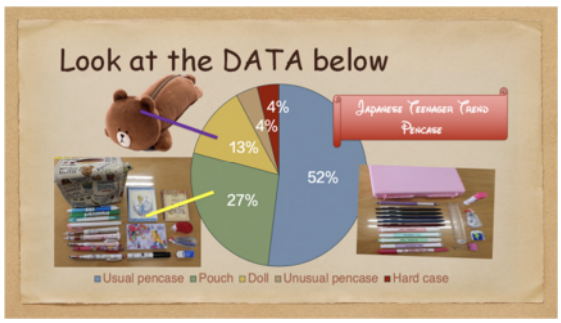
Photogenic

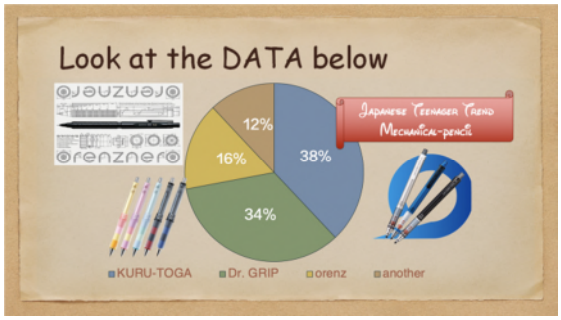
BAE

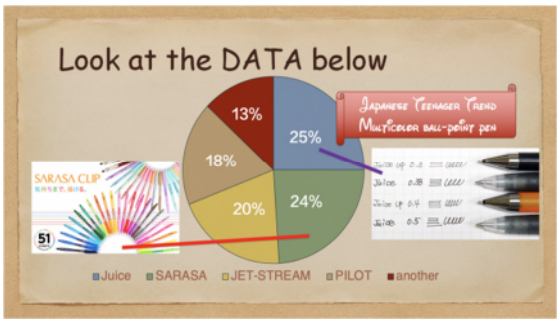
映え

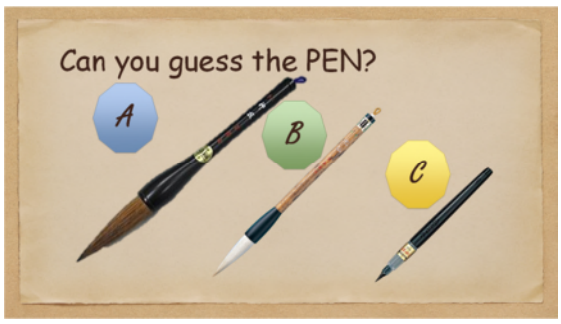
Group C　武神　直樹、野中　太一、佐藤　柚衣



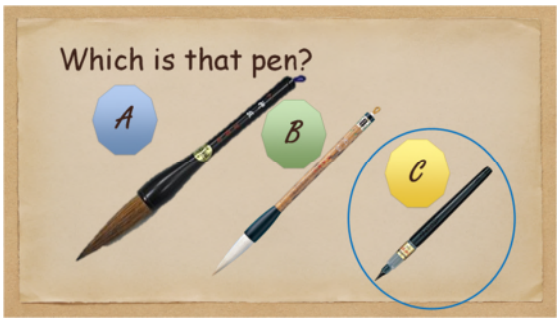




Can you guess the PEN?
A
B
C

Please watch this video


Which is that pen?
A
B
C

FUDE pen
祝
東條
$ 3.50

Do you find your favorite things?
Thank you for listening!

# 15.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ

| 回 | 年度 | 派遣期間 | 派遣人数 |
|---|---|---|---|
| 1 | 平成２年度 | 12/23～ 1/ 3 | 15 |
| 2 | 平成３年度 | 7/29～ 8/ 9 | 20 |
| 3 | 平成４年度 | 7/22～ 8/ 2 | 10 |
| 4 | 平成５年度 | 7/23～ 8/ 3 | 12 |
| 5 | 平成６年度 | 7/22～ 8/ 2 | 12 |
| 6 | 平成７年度 | 7/21～ 8/ 1 | 15 |
| 7 | 平成８年度 | 7/26～ 8/ 6 | 12 |
| 8 | 平成９年度 | 7/20～ 7/31 | 12 |
| 9 | 平成 10 年度 | 7/21～ 8/ 1 | 12 |
| １０ | 平成 11 年度 | 7/21～ 8/ 1 | 12 |
| １１ | 平成 12 年度 | 7/29～ 8/ 9 | 12 |
| １２ | 平成 13 年度 | 8/18～ 8/29 | 12 |
| １３ | 平成 14 年度 | 8/17～ 8/28 | 12 |
| | 平成 15 年度 | *サーズの影響により、安全重視のため中止* | |
| １４ | 平成 16 年度 | 8/14～ 8/25 | 14 |
| １５ | 平成 17 年度 | 8/13～ 8/24 | 14 |
| １６ | 平成 18 年度 | 3/21～3/30 | 14 |
| １７ | 平成 19 年度 | 3/21～3/30 | 14 |
| １８ | 平成 20 年度 | 3/20～3/29 | 15 |
| １９ | 平成 21 年度 | 3/19～3/28 | 15 |
| 20 | 平成 22 年度 | *震災の影響により、延期* | |
| | 平成 23 年度 | 3/16～3/23 | 13 |
| 21 | 平成 26 年度 | 3/14～3/21 | 10 |
| 22 | 平成 27 年度 | 3/12～3/19 | 10 |
| 23 | 平成 28 年度 | 3/11～3/20 | 10 |
| 24 | 平成 29 年度 | 3/7～3/16 | 10 |
| 25 | 平成 30 年度 | 3/6～3/15 | 10 |
| 合　　計 | | | 317 |